

子ども学の源流を次世代につなぐ

幼児の教育

[特集] 問い直そう、保育の中のあたりまえのこと
「遊ぶ」ことは「学ぶ」こと?

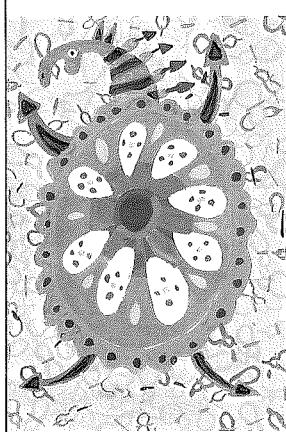
[シリーズ] 子どもが育つ場所を訪ねて
東京都 ふれあいの家 おばちゃんち

[アーカイブズ] 幼児の教育 110年の散策
阪神淡路大震災関連の記事から

夏 2012

since 1901

「かかわり」の
考え方わかる!



「気になる子」？その姿から考える
かかわり事例集

著者：石井哲夫
監修：高橋保子

実践事例を ていねいに読み解く！

Point ①
本書を通じて

子どもとの
かかわりが
見えてきます！

Point ②
本書を通じて

園外との連携が
見えてきます！

Point ③
本書を通じて

体制の整え方が
見えてきます！

画：市川浩志

「気になる子」？その姿から考える かかわり事例集

石井哲夫／著

社会福祉法人高原福祉会 村山中藤保育園／協力
(法人理事長 高橋保子先生が読売教育賞 受賞)

定価1,890円（税込）

25.7×18.2cm 120ページ

10928

こんな事例に心あたりはありませんか？

- 叱られることが多いRちゃん 4歳・女児
- 着替えのできないEちゃん 4歳・女児
- 人とかわるのが苦手なSちゃん 3歳・女児
- お遊戯会に参加したTくん 4歳・男児
- 保育者をどうサポートするか
- 子ども家庭支援センターとの連携

対談 石井哲夫 × 野田聖子

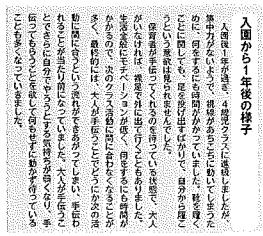
（衆議院議員）「ハンドディキャップをもつ子どもの親として」を語載

「発達障害者支援法」の産みの母、野田聖子議員が、一人の子の親として、一人の議員として考えたことを語ります。

実際に園から寄せられた事例と対応例を紹介

●事例紹介 第2章 事例3から ●

「着替えのできないEちゃん」
(4歳・女児)



●保育者の悩み ●

「着替えに時間がかかる。
ボタンを見てくれない」という悩みが。

著者・石井哲夫による
解説や事例から派生した
疑問に応えるQ&Aなど
読み応え十分！

●対応例 (かかわりの特徴など) ●

「ボタンをもつことができない」のか、それとも、
「ボタンをボタン穴に入れられない」のか。
何ができるのか理解する。

子どもの姿に変化が！



画：ヤマタカマキコ

子どものまなざしの向こうに

目に見えて写っているものの向こうに、
見る者的心に映るもうひとつの子どもの世界が
聞こえてこないでしょうか。



「あつ、いた!」「あえた!」
「出会うたびにうれしくて。」

目 次

表紙の図柄は、お茶の水女子大学附属幼稚園内にある
ステンドグラスの模様をデザイン化したものです。

〔写真〕

- 子どものまなざしの向こうに 1

〔目次 プロローグ〕

- 子育ての季節 浜口順子 2

〔特集〕

問い合わせ、保育の中のあたりまえのこと 6

「遊び」ことは「学ぶ」こと?

- インタビュー 小川博久氏 (聞き手) 浜口順子 4

- 私はこう考える 「遊び」と「学び」 佐々木 晃 13

- 「遊び」とは? 「学び」とは? 横井絵子 17

- 危険と付き合う力をつける 嶋村仁志 21

〔シリーズ〕

子どもが育つ場所を訪ねて

- ふれあいの家 おばちゃんち 佐藤寛子 24

〔実践研究〕

私の保育ノートから

変わっていくこと 変わらないこと

- ～幼稚園からこども園へ～ 石矢友里 30

- 保育の学び、教科の学び 満田琴美 36

〔からだ者〕

食べる・つながる・育つ

- 命を学ぶ食農保育(2) 保育者のあり方を問う 倉田 新 42

〔保育エッセイ〕

続・心が育つということ

- 堀合文子先生に学んだこと 豊田一秀 46

幼児の教育 夏 2012

第111巻 第3号

〔子ども学探訪〕

編集顧問 倉橋惣三とキンダーブック

明治・大正の絵雑誌からキンダーブックへ

浜口順子

51

〔講演〕

「現代の保育制度変革の中で起こっていること」

渡辺英則

56

〔抄録〕

渡辺久子先生のインタビューから ーもう一つの大切な話・遊びー

ダーリンブル親子

63

〔アーカイブズ〕

幼児の教育110年の散策 阪神淡路大震災関連の記事から(2)

—第98巻第1号(1999年1月)より— 菊地知子

67

〔子ども学のひろば〕

学会 研修会情報・読者投稿・エピローグ 他

71

プロローグ 子育ての季節 浜口順子

夏である。人生を四季に例えると、子ども期は春、子を授かり子育てに忙しくなる時期はやはり夏なのではないか。暑い夏の盛り、よほど気持ちを整えないと、繊細な作業は難しい。こういう時期に、親や保育者として子育て担当者となる巡り合わせをどう考えればいいのか。秋から冬の思索の深まる季節には、子どもも成人となり、せいぜい孫や近隣の小さい子どもをいとおしく眺め、はて自分の育てた子をこんなふうにゆっくり愛でていただろうか、と省み悔いるような思いをしがちである。

人事を超えた自然の摂理でこうなって

いるのだと考えれば、人生の酷暑期に、淡々と、子どもの心身の不安定を支えることに徹してさっと子育てなど通り過ぎてしまうほうが、育てられる子どもはよほどまつとうに育つのかもしれない。

子どもの遊びは、人生の春にその生命力をほとばしらせる様子なのである。特集で「遊び」をテーマに小川博久先生のお話を伺った。大人はさっと「ふけろ」。かかわり過ぎると子どもの主体性は育たない。子ども期に、萌える青葉のように遊んだ経験の乏しい保育者が増えている。ふけるタイミングを見取れるのだろうか。

特集
問

い直そう、保育の中のあたりまえのこと

「遊ぶ」ことは「学ぶ」こと?



インタビュー

おがわひろひさ
小川博久氏

東京学芸大学名誉教授。

前日本保育学会会長。主な著書に『保育者論』(樹書房、2000)、『遊び保育論』『保育援助論』(ともに萌文書林、2010) 他多数。

保育・幼児教育の世界で、あたりまえのように、大切に使われている言葉、少なくありません。今回はその中でも、大切中の大切、「遊び」を取り上げます。保育所や幼稚園などの集団の中での遊びについて「遊び保育論」という著書も書かれている小川博久先生にお話を伺いました。

早口でユーモラス、そして刺激的でもある話しぶりに引き込まれ、あつという間に時間が通り過ぎていったインタビューでした。現場で実際に保育する人に伝わる、そこに生きる子どもが活き活きとする理論を追求し続けてこられた方のお話だと実感しました。

聞き手

浜口順子(お茶の水女子大学大学院)

(編集委員会)

幼児教育の世界へ

浜口 先生が幼児教育の研究を始めたきっかけはどのようにだったのですか？

小川 僕が北海道教育大学から東京学芸大学の幼稚園課程に赴任した時、幼児教育は本当に素人でした。ちょうどブルーナーの研究をやっていて、『play』というペンギンブックスから出ていた本を読んだりもして、遊びのことをやりたいと思ってたんですね。

最初の幼児教育との出会いは、津守（眞）先生の『保育の体験と思索』なんですよ。感動したのね。

浜口 お茶の水女子大学附属幼稚園の話ですよね。

小川 そうそう、それです。三年間附属に通いつめて考えたことが書いてあって、「よし、俺もこれからは現場に通おう」と思ったわけです。それで、ちょうど自分の子どもが出来たんで、僕が先に帰つて二人娘の面倒を見たり、一緒に遊んだりすることがあつた。そのころちょうど番町幼稚園に実習巡視に行つた。それで子どもと遊んじゃつたわけ、僕が。そ

して、相撲とつたら子どもがやんちゃで、僕のワイシャツのボタンを三つくらいバーッと取っちゃつた。そしたら、幼稚園の先生が感動して、「大学の先生で子どもとこんなにアホみたいに遊ぶ人は珍しい」って言われた。それからいろいろな所の園内研修に口コミで呼ばれるようになつて、足しげく現場に通つた経験から書いた本が、最初の『保育援助論』なんです。

子どもが保育室で遊んでいる。他の子どもは室外で遊んでいるから外にも行く。その、外へ行つて戻つてきた時の保育者の入り方。部屋の子どもがどういう状態であるかを確認して外に行つて、帰る時に、さつきの子どもの動きはどう変化したかなつていうふうに思う保育者は、テラスのところでいつたん止まつて、中を見てから入る。ボーッと入つていくのと違うんだ、っていうようなことを、僕は現場の保育者を見ながら気付いたわけです。

浜口 保育者の見方を見ていたのですね。

小川 私はやっぱり教育学だから、子どもと同時に、

保育のかかわり方が気になるわけです。私の遊び研究は、大人がどう遊びにかかわり得るのかということが基本にあるんです。

本来、遊びっていうのは子どもがやるものでしょう。大人って、もしかしたらお邪魔虫じゃないかとね。最終的には子どもの自己決定性で、遊べるようになつたら先生はお呼びでない、その場から引き揚げるべきだ。それは知らん顔するのではなくて、見る側に回るべきだっていうのが、ずっと自分の基本的な態度なんですね。大人は子どもと一体化することはあり得ても、どつかで保育者である以上は、大人の、教育者としての顔が出てくる。その場合に、いつたいどこまでかかわって、どこまでかかわることができないのか、みたいな関心が私の中に最初からあるんですよ。

どんなにすてきな保育者でも、子どもになりきることはできない。「お帰りの時間ですよ」とか言わなきやいけないぢやないですか。役割の自覚つてのが大事だというふうに思つていて。

浜口 幼児期は伊豆大島にいらしたのですね。

小川 その前は東京の武蔵境にいたんです。立川で生まれて。親父が小学校の教員で、大島に転勤に。幼稚園には行つてないです。五歳から中学三年までいたんですね。大島に行つても、独りぼっちで、遊び相手がなかなかないんです。でも、自然の中で、大人たちが漁場に出る前に船の上でしゃべったりするのをじーっと聞いてたり、海を見てたりするのが好きでした。高い木に登るのも大好きでしたから、サクランボを探つて親に注意されたりすることがよくあつた。大島の島桜つていうのはサクランボがおいしいんですよ。だから、大島の遊び体験というのが、私の根っこにあるんです。遊びつてっていうのは、本来、自分たちだけでやるもんだっていう意識が僕の中にあつて。

浜口 十分遊んだっていう記憶が……。

小川 それはもう、中学三年の三学期まで遊んでましたからね。それでまた、親が心配して越境入学させたわけですよ。行つた先が、親父のふるさとに近

い伊豆の静浦という所なんです。静浦中学は三か月しかいなかつたんだけど、いまだにそこの親友と付き合つてます。行つた先の親戚のおじさんが、これが面白い人で、話せば切りがないんだけど、網元の次男坊で、世界を放浪した後、終戦後アメリカから強制送還され故郷で漁師をしていた。そのおじさんが沖に出ると、朝帰つてきて「イワシを取りに来い」つて言うんですよ。朝五時に起きて行くわけ。片口イワシを水で洗つてさらして食べるとか、シラスを生で食べるとか、忘れられない経験です。そういう原体験がある。おじさんは酔つぱらうとスペイン語が出てくるんです。本当に男っぽい人でしたけどね、私のことを息子みたいにかわいがつてくれて。

遊びは「遊動」

浜口 大学では教育学を専攻されたのですね。

小川 教育方法学です。しかし、私の好みは教育学よりも……教養学的でした。映画を見たり、小説を読んだりすることが好きでした。私の中で遊びを研

究するつていうのは、とにかく、学校教育がもつてゐる教授的でリジットな関係をどうしたら子どものが自己解放にしていけるか、そういうことだつた。最初のころ、守屋光雄さんの北須磨センターに行つた。あそこは、非常に奔放な遊びをやつていた。三歳の子どもが、かけを登つていて、途中で怖くなつても、後から他の子がどんどん登つてくるので「うわーっ」で泣いて上がるしかない。けがすると「〇ちゃん、メンソレータムつけてあげるから」と、そういうふうです。それで僕は感動してね、その時、子どもの遊びは自己を無限に解放する、という主旨の論文書いたら、守屋先生が面白いと言つてご自分の著書に入れてくださいました。でも、今はちよつと考え方方が違つてきたんです。

最初、うちのかみさん（小川清実氏）が遊び研究やつてたんです。で、私も遊びの研究をやつてたので、テーマが一緒になつちゃつた。鬼遊びの研究で、そこで遊びとして魅力を感じたのは、追う追われるっていうのがアンビバレンツになつていて、「捕まり

たい」「捕まりたくない」

の両義性だということ。

そういうところに、遊びのもつている非常に大事なスピリットがあるんですね。ないかということが、私の基本的な遊び観です。



0歳の子どもでも？

小川 あります。0歳なんかの場合は、一番基本は「いないないばあ」ですよね。「いないないばあ」っていうのは、親のもとに、親の作用圏の中にあって、親の規範の中で安定するわけです。で、そういう親が消えるわけ。消えて現れる。ここに子どもの「遊動」があつて、だから「遊動」っていうのは不安と、幸せの、行つたり来たりなんだな。

遊びの学習っていうのは、見てまねるんですよ。

そこに学びの基本がある。見てまねる場合にはモティベーションが学習主体の側にある。遊びがうまい、っていうのは、目利きであり、状況察知であり、直観知がないとできないんですよ。その直観知というのは、遊びの中で身に付ける。子どもの伝承遊びの方なんです。私は、シリアルなアクティビティの中にも「遊動」というものがあると考える。それは一種の価値の宙吊り状態で、捕まえたくない、捕まえたい、というような状態。

浜口

それはどんなに小さい子どもでもありますか。

あるかつて探す時にムカゴ探すわけですよ。小さなムカゴがある。そこを見るとそこら辺を掘ると太いのがある。これなんかは非常に探索的なんですね。こういうのが、自分の中ですごく、大好きで。今でも、自分の研究でんまり文献実証主義的なのは好きじゃない。つまり extrapolation（外挿）ですよ。学生の論文指導で「この辺ねらってみ、ここを。探してみ」とか言つて、当たつたりするどうれしい。

異年齢で遊び、見てあこがれてまねる

浜口 幼小をつないでいく学びのとらえ方と関係がありそうですね。

小川 はい、人間の学習つていうのは、近代になつてから、本を使って学ぶ、文章で学ぶ。言葉で教えられて学ぶんですよね。一方で、少なくとも前近代

社会の場合には、体で覚えていきますから、常に見てまねるわけです。職人なんかは「勘どころは教えられない」というし、歌舞伎役者とかは今もそう。近代社会になつてから、本中心の「教えられる文化」

になつてきた。教えられる文化つていうのは、大量生産です。基本的には、子どもたちはサバイバルするためにどうやつてお水飲んだらいいか、食べたいものをどうやつて食べたらいいかとか、見て学んだんです。そういう能力を、教えられる文化が肥大化する中で、どんどん抑圧されてきた。

浜口 現代の幼児教育において学びはどうなつてい

るでしょうか。

小川 今の保育では、保育者つていうのは援助者であることを越えて教授者になつてしまつていて。ところがね、子どもは遊びの中で、見てまねたいんです。保育者はモデルであるべきです。僕が何で今の保育に不満をもつてゐるかつていうと、昔の伝承遊びの研究をやつたり、子どもの遊びに参加したりしてきたからです。

昔小さかつた時、近所の小学生が野球をやつてみると、私はみそつかずだから、入れてもらはず見ていた。人数が足らなくなると「面子めんづが足りねえんだよ、誰か……」。そうすると「下手くそだけど、あいつ

しかいない」とか言つてイヤイヤ入れてもらえる。僕はうれしくてしようがないわけ。そうすると「お前ライト」つて。球が来ないからね。それからバッターライフだよね。「かぶれ、かぶれ!」つて言われる。デットボールで出るつていうこと。そういうのが、一年生になるとちよつと言われなくなる。一年生になると、センターくらいになる。四、五年生になると、内野になる、ね。打順も三番とか四番とか。六年生になると、ピッチャーになるんですよ。こういう伝承遊びを、僕は体験している。

昔の伝承遊びの研究だとね、各家できょうだい多いじゃないですか。お兄ちゃんがちつちやい子、連れてくるのね。子守で。子守兼遊びだから。そうすると、校庭に来た時に、高学年なんかはみんな幼稚園連れて来るわけ。でも幼稚園は遊びにならないからみそつかすで、そこに置いとくわけです。置いといて、自分たちだけでやるわけですよ。だからさつき言ったように、人数が足りなくなると入るわけですよ。こういうシステムを、僕はずつと研究していたのだ

けど、その中でだんだんわかつたのは、一番年長さんがあこがれの的なんです。あこがれてるだけじゃうまくならないけど、入れてもらつた時に自分よりちよつとうまいやつが一年生か二年生。見てまねる対象がちよつと上の子ども。あこがれが二重になるんですよ。学習目標が。つまり、あこがれの先輩と、見てまねる先輩と。しかも、日常生活では、そのお兄ちゃんたちは、おしつことか、泣いた時なんかにケアしてくれるんです。ケアして、求心的に集団をつくっていく。ところが、遊びになるとほかされる（放置する）わけ。つまり、集団に入れながら、ほかすわけですよね。求心力と遠心力とが同時に働き、仲間に入れても、いざという時はほかされる。そうすると距離が出来る。仲間に入れられながら距離が出来るという構造によって、年下の未熟な者はどうしたら早く上のほうに行けるか、というふうに考えて、それが学習過程になつているわけです。いろいろ調べてみると、結局、徒弟制度と同じなんですよ。徒弟文化なんですよ。

生田久美子が「威光模倣」って言っているけれど、年長は何か輝いてるからあこがれてまねしたくなるという働きが生まれるわけです。この異年齢社会における見てまねる文化っていうものが、昔の、遊びの仕組みだつたんじやないかと思います。異年齢で遊ぶことがなくなってきた、だから遊びがだんだんですよ。持続性がない。昔はずつと同じ仲間で長い時間遊んだ。同じ場所に毎日集まって、ケアされて、見てまねるわけです。こういう文化がなくなった。

こういう遊びを保育の中に生かせないかと考えて、今から十五、六年前から現場に入ったわけです。最初は保育に入るの、怖くてね、でも自分がやつてみたわけ。最初は年少さんの四歳くらいの子どもと遊んだ。まず一番いいのは粘土なんですよ。粘土っていうのは、身体のコンセン트レーションを出せるわけです。大きな粘土の塊をバーンとたたいてやり始めるとき、子どもが入ってくる。ある時は、小学校の林間学校で手打ちうどん作ることになった。子ども

がワーッと来て「やらせろ」とて言う。「駄目だ」と答えると「何でやらせねえんだ」とて子どもは言う。「これ、失敗したら食えなくなるんだよ。それでもやるか?」って。子どもはビビるわけ。それでもじーっと見て、「やらしてくれ」とて言うんだよな。「あの、昼飯だよ、失敗したらみんなの昼飯抜きになるぞ、それでもやつてみるか?」って言うと、やるんだよね。保育者が、テクニックじゃなくて、あこがれの存在として、子どもに対する引力関係を生み出すこと。教えるというおせつかいをせず、幼児の関心を引き付ける。これが、私が制作コーナーに座るっていうことなんです。

大人は最後はいなくなる

小川 この遊びの先としては、例えば制作コーナーにいるでしよう? 僕はね、時が来たら「あそこから、ふけろ」って言っている。「ふけるチャンスをつかめ」って。つまり、先生がいなくても、子どもたちで遊びだすという時点が出来たら、「全部引き

揚げる」ということを言っています。なかなか引き揚げるチャンスってないんだけどね。

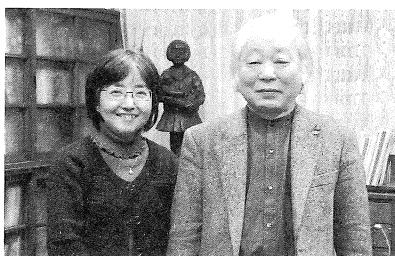
つまり、自分が遊び保育論として構築してきたのは、共通に子どもがある楽しい時間を過ごさなくてはいけないからで、そうなつたら、どんどん梯子外していくのが、私の考え。でもそこまでの保育をなかなか見ることができないんです。基本的に、ストリートプレイが遊びの原点だとすると、最終的には、大人（保育者）が抜けるのです。いなくなるつていうことが大事で、周りで見てて「俺の出る幕ないよね」って大人が言えたら、これは最高だと思う。そこの理論をどう構築するかっていうことは、自分の頭の中にあるけど、それは現場の先生に、なかなか言えてない。

年々、子どもたちが今の情報化社会の中で、要するに受け身になつていてるから、自分の遊びのストーリーが出来なくなつていてる。昔はよく遊んだよ。でも年々遊ばなくなつていてる。なぜか。保育者自身が遊んだ経験がないのだから。積み木一つあればいろ

んな世界が出来る、っていう時代から、みんなほとんど電動おもちゃで遊ぶ、さらにはパソコンプレイの中で遊ぶようになつていてるんですよ。電池が切れると遊べない。そういう時代の中で、どうしたら子どもたちが自分たち自身の世界を構築できるかっていうことを、大人たちが整備しながら、最初はあこがれの対象となつて、おせつかいをしないで、必要な時にサポートして、必要な時に抜けるというような関係を構築しないと、遊びは持続しません。

浜口 始めのほうで、先生が、子どもの遊びに大人はお邪魔虫なんじゃないかって言われたこと、気になつていきましたが、最後にその意味がよくわかりました。どうもありがとうございました。

（平成二十四年一月十六日）



私はこう
考
える

「遊ぶ」こと
は「学ぶ」
こと?

「遊び」と 「学び」

佐々木 晃

「スペシャルジユースをどうぞ」「ありがとうございます。いただきまーす」。私が容器に口をつけて飲みかけると、「だめだよ。先生。本当に飲んじゃ」と

幼児にあきれられた。すっかり興ざめてしまつた様子である。幼児たちのごつこの会話にジョークを挟むと、「先生、ふざけないで。これは遊びじゃないのよ」と、注意される。

幼児の遊びは不思議で奥深い。一見、矛盾するかのような幼児の言葉の背景には、意識の複雑な重層構造が垣間見える。「私は遊んでいる。これ

は遊び」という意識の層（「地」）の上に、生命力に満ちた幾重もの遊びの物語が「図絵」を織るかのごとく描かれ、展開されていく。

私は幼児の遊びが興味深く、いとおしい。「大人に守られている」安心と愛情に包まれながら、わくわくするような未知の世界と出会つた私の幼児期の記憶につながっていくからなのだろう。幼児の遊びを見取ることの難しさを恐れず、学びや成長という文脈から理解したい、と切に願う私の保育研究の根っこがそこにあるように思う。

事例「ドングリ」（三歳児十一月）

登園すると、カナコはすぐ築山に駆け上がりついく。この日も小柄なカナコはクヌギの根元にあるサツキの植え込みに埋まるようにひざを抱えて、いつもの定位置で物思いにふけるような表情でいた。私も彼女の隣に座して同じようにひざを抱えた。私は、当時、カナコのことが気掛かりであった。鬼ごっこに誘つても「いや」と首を振つた。おやつすら食べない日もあつた。私は友達関係が原因かと心配したこともあつた。家庭での様子を母親に尋ねたりした。

十五年目に明かされた眞実（インタビューより）

「十五年ぶりに幼稚園に行つてみて、あのころのまま、クヌギの木があつたのに驚きました。私は、あの築山でぴかぴかのドングリが落ちてくるのをずっと待つていたんですよね。築山にあるクヌギ

の木から落ちるドングリは、特別なドングリに思えたんです。……中略……みんなで作る基地は遊戯室の積み木、一人の基地は剪定したカイヅカイブキの中だつたのですが、その中央に座ると空がぼっかり見えました。カイヅカイブキと空との境界線がくつきりしていて、その境界線の先から絵本の世界に入つていけるように感じていました。サルビアの花の蜜は甘かつたし、真つ赤なイチゴは長くて細い茎の先にコロンとしていました。折り紙の貝がらつなぎにはまり、切り目を入れて対角線でつなぐとふっくら丸まつたのを覚えています。言いだしたら切りがないほど、不思議に思うことがいっぱいでした」

— カナコ（大学三年生） —

今は大学生になつたカナコの話を聞き、幼児期の遊びが人の学びや成長に深くかかわっていることをうれしく思った。その一方で、行動観察から



は客観的にとらえることのできなかつた私の未熟を痛感した。一人ぴかぴかのドングリが落ちるのを待つカナコの期待やファンタジーに触れ、一緒に遊びの物語を描く楽しみを分かち合いたかつた。私自身も遊び手として遊びに浸り、幼児の意識に触れ共鳴できない限り、良き遊びの理解者にはなれない。そう念じて修養の日々を過ごしている。

事例「ライオンキング」（五歳児 五月）

「シンバこつちよ。今のうちに、お城を直しておぐの。夜になるとハイエナたちが襲つてくるわ」。母ライオンになつているアイが息子ライオン（シンバ）のヤスタカを促して、ムクの枝を運ばせている。

「もう、王様はいなくなつてしまつたの。くよくよしても仕方ないわ。私たちで子どもたちを守るのよ」。アイはそう言つて、娘ライオンのハルカやリナ、ナオコたちと一緒にムクの枝を丸木砦に

結わえ付けている。

丸木砦の周りはムクの木の枝で囲まれている。五人は「城」の二階に身をかがめている。やがて、母ライオンのアイは「お母さんは、何か食べ物を見つけてくるわ。みんな、絶対外に出ではダメよ。いいこと」と言つて、「城」から出ていこうとしている。

私がカメラを持つて前を通りかかると、シンバになつているヤスタカが、「グー。ガオー」と枝のすき間から爪を立てた手を突き出して威嚇してきた。すると、リナが「ダメよシンバ。あれはただの人間。旅行の人なの」と言つてたしなめた。私は「ふー。危なかった。気の立つた子どもライオンだ」と言つて、写真一枚撮つて、場を逃げ去つた。



前日、私たち職員が剪定したムクの枝を使って、幼児たちそれが、思い思いに使って遊んだり、作つたりしていた日の事例である。最初、王様ライオン役のタクヤも一緒にライオンキングごっこをしていて、彼はムクの枝で剣を作り始めて戻つてこなくなつた。このことから王様がいなくなつて母ライオンたちが子ライオンを守るという設定になつたようだ。アイたちは、創作りに熱中して、王様ライオンがいなくなつたことの現実を、ごつご遊びの新たな流れをつくる転機としている。ハイエナたちから身を守る城の修復をすることで、より話にリアリティーが出てくるとともに、ごつご遊びの根拠地の丸木砦と、その周りで行われているムクの木を使ったさまざまな他の活動とを遮断し、自分たちだけの親密なごつこの空間をつくり出している。

幼児たちの遊びは「何かのために遊ぶ」というような目的的なものではなく、それ自体が喜びのためになされている。その喜びに直に向かうが故に、幼児のもつ最高水準の諸能力が総動員され随所に発揮されているようだ。「ライオンキング」の物語との整合性を保ちつつ、現実の友達や遊び場の状態を絡ませながら巧みに編まれていくストーリー、それを演じる言葉や振る舞い、自分たちだけのごつこ空間を創作する技術とアイデア、仲間との駆け引き等、遊びは微視的に見取ると環境や人間関係、言葉や表現等にかかる力を、巨視的に望むと生きるための知恵や作法を育ってくれる。遊びという行為を手掛けりに幼児の意識に触れ、人間を「学び」、共に学びと成長の物語を紡いでいく。この楽しみと恍惚感が「遊び」という意識にまでつながることを夢見てなお修養の日々である。

私はこう
考える

「遊ぶ」こと
は「学ぶ」こと?

「遊び」とは? 「学び」とは?

横井絹子

「遊び」の文脈で「遊び」を語る」と

「遊び」も「遊び」も、非常に定義する」とが難しい言葉です。語る人が何者かによって、また状況によつて、意味や価値が大きく変わります。例えば、

「遊び」は「遊び」の反義語としても、同義語としても使われます。また、ある特定の知識を習得することを「遊び」ということもあれば、人生の経験すべてが「遊び」といわれることもあります。

また、教育分野、とりわけ、幼児教育においては、両者の密接な関係がさまざまに論じられています。「遊び」を通した総合的な「遊び」の実現を目的としているのですから、当然だともいえます。

しかし、「遊び」を「遊び」の文脈に回収してしまうことに対する、ある種の抵抗感や不十分感、さらには「うさんくささ」を感じる人も多いのではないか。そのすつきりしない感覚はなぜ生じるのでしょうか。そのことを考える上で、どうしても「遊びとは何だろう」という根本的な問いに向き合わざるを得ないのでですが、まずは、身近にある事例から考えてみたいと思います。

「遊び」を通した「遊び」って?

ある時、保育になじみのない教育関係者が幼稚園を参観した後に、「今日は遊びの中にたくさんの学び

を発見しました」と、話し始めました。そして、「レストランごっこでメニューを作つていました。これは文字の学習につながりますし、積み木を並べていきます」とくことは、立体図形の学習につながっています」と続けます。これは少し極端ですが、遊びと小学校以降の学習内容を照らし合わせ、つながりが認められる「遊び」の一部の行為を「遊び」とする見方です。

これを聞いていた保育者は、「遊び」における「学び」はそういうしたものではないですよ、と話し始めます。「幼児期は人格形成の基礎となる、心情・意欲・態度を学びます。目に見えない部分ですが、遊びの中で人間関係も育みますし、さまざまな感情を体験して精神的にも成長します。小学校以降では遊びは教科に細分化されていきますが、幼児期は総合的で全体的な学びが大切なのです」……などと、幼児教育独自の「学び」の特徴を伝えようとします。

「学び」の文脈ではすくい切れない「遊び」

ひとりの子どもの「学び」を「遊び」を通してとらえることがあります。
さらば、「遊びの中で運動能力が発達するのですね。やはり、遊びは子どものさまざまな側面の発達に有益な行為ですね」などといった話が出るかもしれません。「発達」も、「学び」や「遊び」と関係付けられることが多い言葉です。

ここで、それを否定するつもりはまつたくありません。しかし、例えば、精神的な成長をしたり、運動能力が発達したりするのは、遊びの副産物であり、本質の部分ではないはずです。子どもたちは、精神的な成長、運動能力の発達といった目的の達成のために、遊びを通じて成長していくのです。

めに遊んでいるわけではありません。

では、遊びの本質とはいつたい何なのでしょうか。ここで、「遊びとは何か」という問い合わせ合う必要が出てきます。この問いに答えることは簡単なことではありませんが、幾つかの説明を紹介します。

矢野^{注1}は、「遊びはもともと有用性の秩序から離脱する自由な行為であり、遊びは遊ぶために遊ぶのであって、遊びを超える目的はない。しかし、教育の世界では、遊びが結果としてもたらす発達的効果をもつて遊びの本質としてしまう」と指摘します。そして、「遊び」とは、自己と世界との境目がいつの間にかなくなつて、世界の奥行きを感じる体験である「溶解体験」であると述べています。

ガダマーハ^{注2}は、「遊び」は「自己」を表現する以外の何ものでもない」ものだとし、西村^{注3}は、特定の目的の達成を目指す世界とは不連続なものとして、「遊びの世界」の独自性を論じています。また、加用は、自我的変容があることが「遊び」と言っています。

以上のように、「遊び」を「遊び」とらしめている

のは、遊びの外部に目的を求める、有用性を追求するような「学び」の文脈ではすくい切れない部分にあるのではないでしょうか。そして、このような「遊び」の核の部分にこそ、人間の生を豊かにしてくれるものとして、さらに、子どもが世界と対話しながら自己を深めるものとして、「遊び」に特別な価値が認められてきた本来的な理由が隠れているのではないか。でしょうか。

「遊び」の必要性を語ることの困難さ

今、ここで改めて確認せざるとも、「遊び」は人間の生を豊かにする価値ある行為だという認識は、昔より感覚的に理解され、共有されていたように思います。しかし、現代では、有用性・合理性・効率性が善とされ、さまざまことを言語化・可視化し、評価・説明することが求められています。教育の世界においても、軌は同一だといえます。

そうなると、「遊び」は、無用で、非合理的で、算定不能で何が起こるかわからない、非効率的なもの

だと評価されがちです。そこで、子どもにとつての遊びの必要性を主張するため、「遊び」の有用性を可視化し、「遊び」は「学び」であることを説明する必要が出てきました。

しかし、「遊び」が有用であると語ること、言い換

えれば、「学び」の文脈で「遊び」を語ることは、「遊び」の本質からすれば奇妙な事態です。本来は有用性とは異なる文脈で語られるはずの「遊び」が、有用性の文脈にからめとられる……私たちは、そこに違和感を抱くのでしょう。また、それを求められる事態に、抵抗を感じるのではないでしようか。

だからといって、「遊び」は「学び」です、といいう一言で済ませ、内実を語ることを放棄してしまっていいのでしょうか。また、「遊び」の経験を有用性の

枠での「遊び」の経験に分解し、説明することで満足していいのでしょうか。

どちらも、「遊び」の体験の、何にも代え難い奥深さ、浮遊感、異様さ、面白さ、楽しさ、生き生きしさ、一体感（……どの言葉を使っても十分でない、

もどかしさを感じますが）を語ることをあきらめてしまっているように思います。まずは、有用性という文脈での「学び」の呪縛からいたん離れて、児童教育の「学び」の射程を編み直す必要性を、ある種の危機感とともに感じています。

しかし、たとえ、新しい「学び」のファイルターが出来たとしても、すくい切れない部分が必ず「遊び」にはあるでしょう。逆にそのすくい切れない部分があるからこそ「遊び」であるともいえます。常に「遊び」から逃れしていく「遊び」に遊ばれつつ、子どもと共に遊びながら、どうにかこうにか「遊び」を言葉にする……改めて、今、大切なことのように思います。

（十文字学園女子大学）

注

1 矢野智司『意味が躍動する生とは何か』世織書房
二〇〇六年

2 ハンス・リゲオルグ・ガダマー『眞理と方法I』
(轡田收訳) 法政大学出版局 一九八六年

3 西村清和『遊びの現象学』勁草書房 一九八九年

4 加用文男『子ども心と秋の空』ひとなる書房

私はこう 考える

「遊ぶ」こと
は「学ぶ」
こと?

危険と付き合う力をつける

嶋村仁志

大切なことはわかっているけれど

夏は、子どもが積極的に体を動かす季節です。子どもは、成長とともにさまざまなことに挑戦するようになります。そして、体を動かすことの楽しさや身の回りの環境についてたくさんのことを見ていきます。

その時、皆さんは「危険」について、どのような姿勢で日々考えているでしょうか。「危険に挑戦することで、子どもは自分の限界や他人との協力など、たくさんのこと学ぶ」という考え方を珍しくありません。ところが、子どもが危険に挑戦できる環境を整えるのは難しいと感じている人も多いでしょう。

一つには、今の管理責任追及の風潮があります。「けがをさせたらどうしよう」という不安は、子どもにかかる職に就く人の最大の課題の一つです。自分が大丈夫と思っていても、他の同僚がそうでない場合、「危なそうに見えることは、とりあえず止めておこう」というマイナスの悪循環に落ち込んでしまいます。

マイナスの悪循環を変えるには、情熱だけでは足りません。危険についての考え方と知識を学ぶことで、子どもへの実践は大きく変化します。こうした知識は、保護者から共感を得るための大きな力にもなるでしょう。

リスクとハザード

公園や遊び場にかかる職業では、危険を「リスク」と「ハザード」という二種類の危険に分けて考えます。「リスク」というのは、自ら挑戦する危険のことです。一方の「ハザード」は、隠れた危険のことです、子どもは自ら挑戦することはできません。そして、目に見えない分、大きな事故につながりやすい傾向があります。

つまり、ハザードは知らないと防げませんが、知つていれば防ぐことができます。私たちの役割は、重大なハザードを防ぎながら、子どもがリスクに挑戦できる機会をたくさん残すことです。そして少しずつ危険に触れながら、何が危ないか自分で判断できる大人に成長するための機会をつくることです。

ハザードの種類には、動線の交差やロープの巻き

付き、磨耗、挟み込み、突起物、地面の状態など、幾つかの要素があります。紙数の関係もあるので、ここでは詳しくは解説しませんが、皆さん調べる

ことも可能です。

また、場や遊具のハザードとともに、状況によって生まれるハザードがあります。

例えば、「高い所からの飛び降り」は、私の遊び場でもよく見られる遊びの一つです。地面にはマットを敷いて飛び降りるのですが、子どもがじっくりと時間をかけ、頭の中でシミュレーションを繰り返した上で飛ぶことができれば、けがはなかなか起こりません。中には、三十分も考えた末に飛ぶことを決断した子が、飛んだ直後に感極まって、じわりと静かに涙をこぼす場面に遭遇することもあります。ところが、「遅い。早く飛んで！」とはやし立てられ、自信がないのに緊張したまま飛んでしまうと、けがをするばかりか、子ども時代の武勇伝になるはずの遊びが、生涯の心の傷となつて残ってしまいます。

新しい危険管理の考え方

ここで必要とされるのが、海外では「リスク・ベネフィット・アセスメント」と呼ばれる危険の判断

と管理の方法です。これは、「危険度の高さ」と「その危険に挑戦するメリット」の両面から危険を評価する方法で、子どもにかかる職業に就き、子どもへの知識や経験がある人ならではの技術です。

例えば、「木に登る」という時、その危険（リスクとハザード）とメリットは何でしょう？ リスクは、「高い所から落ちる」「飛び出た枝が顔に当たる」などでしょうか。では、メリットは何でしょう？ 「達成感」「誰かとの協力」「手足の緊張感からくる身体の発達」でしょうか。また、特定の子どもの育ちに照らした特別なメリットもありますよね。

次に、確実に避けたい危険は何ですか？ 「細い枝に乗つて落下すること」「落下した時に、固い地面に強打すること」などですか。こうして重大なハザードを回避する工夫ができれば、子どもが危険に挑戦するための対策が可能になってしまいます。つまり、「やめさせるための理由探し」ではなく、「実現のための工夫探し」が大切なのです。時には、状況によつて「昨日は大丈夫でも、今日は難しい」という判

断も当然あるでしょう。危険は「とにかく取り除くもの」ではなく、「バランスを取るもの」なのです。

興味深いのは、イギリスがこの「リスク・ベネフィット・アセスメント」を社会の仕組みとして取り組み始めていることです。近年では政府健康安全局を筆頭に、全国規模のNPOや研究者も認める危険評価方法となり、保険会社も巻き込んだ議論が展開されるようになつてきました。つまり、「リスク・ベネフィット・アセスメント」を適切に行つている遊び場では、理不尽な賠償責任の請求を保険会社が受け付けない体制が生まれつつあるといいます。

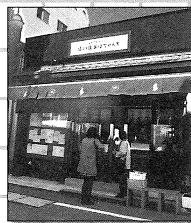
日本では、このような動きが生まれるまで、まだ程遠いかもしれません。けれども、今の私たちが接している子どもは、あつという間に大人になつてしまします。もしかすると、そのころの親には「自分で危険を判断することの大切さ」を教える力が身に付いていないかもしれません。子どもが遊ぶ姿を前にしている私たちは、その最前線にいるのです。

（TOKYO PLAY 代表）

ふれあいの家 おばちゃんち

東京都品川区

シリーズ
子どもが
育つ場所を
訪ねて



日本全国にある「子どもが育つ場所」を幼稚園教員が訪問。自分の目で見て聞いて感じたことをレポートします。

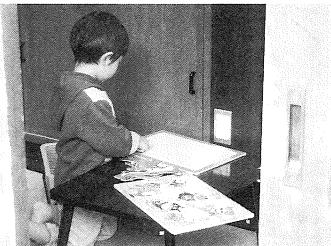
第6回は東京都品川区にあるNPO法人おばちゃんち。昔から人の往来のあるこの場所で、ふれあいやつながりを大切にしたまちづくりが行われています。



北品川の駅から大通り沿いに歩き、道を一本入ると、まるで昔にタイムスリップしたかのようなたたずまいの街が現れる。旧東海道の品川宿。その昔、大行列や旅人たちが行き交ったであろうその通りは、道幅五〇六メートル。すれ違う人同士の自然なやりとりが聞こえてくる親しみのある懐かしい雰囲気の場所だ。そんなてきてきな場所に、今回私たちが訪ねた「NPO法人 ふれあいの家 おばちゃんち」はあった。

◆一時預かり「ほっぺ」

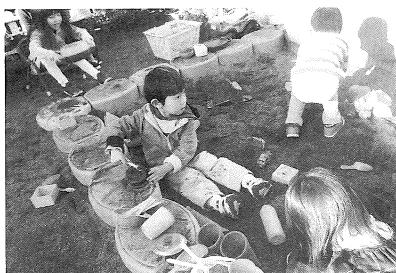
レトロな雰囲気の建物が目に入り、思わず近寄る。ちゃぶ台に小さな男の子が絵本を広げているのが、ガラス戸越しに見えた。おぶいひもで赤ん坊を背負った女性もいる。コーヒー一杯百円の張り紙。「街猫」という名前のカフェが併設されている。



昭和の雰囲気の漂う一軒家。ここは、「おばちゃんち」が、品川区の補助金を得て行つてゐる一時預かり事業「ほつペ」である。子ども連れのお母さんが、買いた物途中にちょっとひと休みできる、そんな雰囲気が漂つてゐる。

建物の裏へ回ると、かつては駐車場だつたという空間に、子どもたちが保育者と遊んでいた。小さいけれど程よいその空間は、土の地面に、砂場、水場があり、植物が植えられ、時々立ち寄るらしい猫のためのトイレまで用意された、ほっこりと温かい場所。

日だまりの中で遊ぶ子どもたちに見とれていると、「いらっしゃい！」と笑顔で声を掛けてくれたのが渡辺美恵子さん。NPO法人「おばちゃんち」の代表である。子どもたちを迎えてきたお母さんたちに、気さくに声を掛け、子どもたちからも仲間の保育者



◆「北浜こども冒険ひろば」

からも「みこちゃん」と親しまれている渡辺さんは、初対面なのに、どこかで（もしかしたら、幼いころに？）出会ったことがあるかもしれないと思うような優しい笑顔の人だつた。

渡辺さんに「暗くなる前にぜひ行つてらっしゃい」と言われ、次に訪れたのが、「北浜こども冒険ひろば」だ。ここも、品川区の委託で、「おばちゃんち」が管理している事業の一つである。

学校が終わり、一度家に帰つた子どもたちが、友達と一緒に立つて、三々五々、北浜公園に集まつてくる。ちょうどこの日は、七輪で炭がおこされ、べつこう飴作りも体験できた。





子どもたちは、スタッフから程よい大きさの玉杓子じやくしを借りてくると、家から持ってきた砂糖を、ひたひたの水と一緒に玉杓子に入れて、七輪の火にかざす。

一度溶けて透明になった砂糖水が、しばらくするとふつふつと煮立ってくる。そして、甘い香りとともに、少しずつ飴色に色づいてくる。この間、とにかくかき混ぜたりしない。焦らずじっくりおいしくなるのを祈りながらじっと待ち続けるのだ。一点を見つめ、思いを込めて、ひたすら待ち続ける時間がこんなにいとしく豊かであることに、改めて気付かされた。祈りが通じて出来上がった、おいしいべつこう飴をしゃぶりながら、子どもたちは笑顔で遊び始めた。

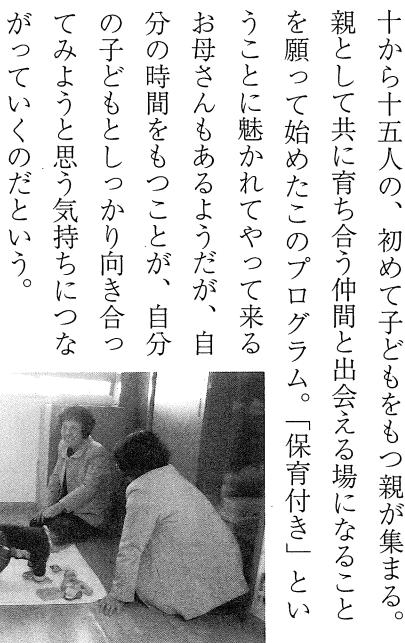


◆品川のおばちゃんパワー

北浜公園で子どもたちと一緒にしばらく遊び、日も暮れかかってきたところで、すぐ近くにある「ふれあいの家 おばちゃんち」にお邪魔した。玄関の引き戸、台所に置かれたテーブルと椅子、前に訪れたことがあったかと錯覚するくらい懐かしいにおいのするこの空間が、渡辺さんのご自宅兼「おばちゃんち」の事務所である。

子ども時代、話し相手や遊び相手となり、ご飯を作つて食べさせてくれた近所のおばちゃんたちの存在、そして、この町で育ち、今もここに暮らしていることが、「おばちゃんち」を始めた一番の理由だという。「おばちゃんは、先生ではないのよね。肩を並べて一緒に暮らす人。先生は学校にいれば十分でしょ」と渡辺さん。みこちゃん、くーさんと、スタッフの皆さん呼び名が○○先生ではない理由もここにあり、スタッフ同士が横並びの関係であるということが伝わってくる。

子育てを終えた豊かな経験者であるおばちゃんたちが「おばちゃんち」の活動を支えているが、「おばちゃんは、お母さんたちの子育てを奪う役ではない」と強調される。「おばちゃんち」が出来て三年目に立ち上げた「保育サポートー養成講座」では、三十時間のプログラムを組み、保育サポートーとしてのおばちゃん魂を養成するという。子育てをするお母さんと育とうとする子どもたちの関係を支える存在としてのおばちゃんの養成。こういうおばちゃんたちが、すぐそばにいてくれたら、何で心強いことだろう。



◆親同士の育ち合いの場

「おばちゃんち」の事業の核であると、「Nobody's perfect」（カナダで生まれた親育ちプログラム）では、若いお母さん対象の講座も行っている。一度に

◆赤ちゃんから高齢者までが、世代を超えて ふれあい暮らせる、そんな「まち」をつくりたい！

現在、「おばちゃんち」で請け負っている事業は、次ページの図のとおり。

2011年度「ふれあいの家—おばちゃんち」へようこそ



取り組みの一つひとつを丁寧に見ていくと、人が人として豊かにかかわり合いながら、育ち合ふ生きていくためのあたりまえの環境がそこにあることに気付かされる。「おばちゃんち」は、あたりまえ故に見失いがちである、人として生きる大切な環境を、「品川」という地域に呼び戻す拠点になつていて。

「おばちゃんち」のチラシに、次のような言葉があつた。「赤ちゃんから高齢者が集えるところ、子どもがすこやかに育ち、若者が輝き、おとなが心ゆたかに暮らし、世代を超えたふれあいが繰り広げられる身近な場所、互いに支えあい共に育ちあつて暮らす、そんな『まち』をめざします。」

地域に暮らすさまざまな人たちの育ちを見守る目をもつた「まち」をつくろうとする思いが、渡辺さんの語る一つひとつの言葉から伝わってきた。

◆できることには限りがある

バイタリティーあふれる渡辺さんだが、少しも威圧感がないのはなぜだろう。最後に語った言葉に、

その秘密があった。「できる」とには限りがあるでしょ。それでいいと思うの」。力を入れ過ぎず、程よく抜けた緩い雰囲気が「おばちゃんち」を優しく包んでいる。

「おばちゃんち」の事務所も、一時預かりの「ほっぺ」も、訪れたすべての場所がほっこり落ち着く懐かしい空間だった。「広さが規模を決める。私はおうち感覚がいい」。そう語る渡辺さんの笑顔に、子どものころにお世話になつた懐かしい近所のおばちゃんの面影が重なつて見えた。

訪問者／川辺・佐藤・宮里

文／佐藤寛子

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

◆一 訪問メモ◆

- ◆ 訪問時期：2011年12月
- ◆ 訪問場所：特定非営利活動法人
ふれあいの家 おばちゃんち
- ◆ [住所] 東京都品川区北品川2-28-19
- ◆ [電話] 03-3471-8610

変わつていくこと 変わらないこと ～幼稚園からこども園へ～

石矢友里

私には、まさに「保育ノート」がある。もう何冊目になるだろう。新卒のころからこれまで五年の間ずっと、欠かさず持っている。好きなキャラクターのもので、B6かA6サイズのリングノートというのが私のこだわり。

ノートの中身はというと……新学期に準備すること、週日案をもつと詳しくした自分だけのメモ、来週の予定、やらなければならぬことのリスト、研修会や研究発表の時の講師の先生のお話、訪問指導での助言、保育中にふと子どもが口にした面白い一言、最近のあの子の気になる姿……とにかく何でも書いてある。大事なことをコロッと忘れ

てしまうことのないように、ふとひらめいたことを後でじっくり考えられるように。そして、書くことで頭の中が整理できるように。そんなふうに書いてきたら、いつの間にか、保育者としてのこれまでの私の歴史になつた。ある研修会に参加した時のページに、「どんなに一生懸命にメモを取つても、しばらくしたら忘れててしまうもの。聞いて覚えているものだけが心に残る」という講師の先生のお話がメモしてあって、自分で笑つてしまつた。

だから保育室のピアノの上などに、このノートをポンと置き忘れてしまった時の私は、不安でた

まらない。「どこ」行つちゃつたんだろう。えーっと……さつき書いて、それから……」と記憶をたどり、園内じゅうをぐるぐる歩いている。他の先生方にも、「私の小さいノート、どこかで見たら教えてください」と言つて回る。そして見つかつた時のうれしさといつたらない！保育ノートは、自分のパートナーのようなものだ。

この愛すべき私のノートたち。それぞれタイトルが付けられるくらい、ドラマチックな保育生活だったと思う。この原稿を書く機会をいただき、以前のノートを久しぶりに開いてみた。

なりたかつた幼稚園の先生に！

……でもわからぬことだらけ

公立としては伝統のある幼稚園で、二年保育の四歳児担任になつた。今思い出すと、深い穴を掘つてしまいたいほど恥ずかしいことばかりだつた。新卒なら誰でも……と思うかもしれない

が、自分のこととなれば、そんなことは言つていられない。周りは大先輩ばかりで、わからないことも「わからない」と言えないまま、毎日が過ぎていつた。一週間が長かつた。私のノートは、いつも消化し切れないくらいの「やることリスト」でいっぱいだつた。保育雑誌で見たことや隣のクラスでしていたことをとにかくやつてみた。そして落ち込んで、反省して、「明日はどうしよう」と考えているうちに、次の日が来る。それでも、「友里先生！」と呼んでくれる子どもたちが、心からいとおしかつた。保護者の方には、子どもたちと一緒に、私も育ててもらつていたと思う。

初めての年長組担任！　え……？　私だけ？

何の巡り合わせなのか、昨年までの教師は、私以外全員代わつてしまつた。一年目の最後に、職場を去る先生から「伝統なんて気にしないでいいからね。新しいメンバーで、新しくつくつていけ



「いいんだよ」と言つてもらつたことをいつも思
い出していた。持ち上がりで五歳児の担任になり、
「何で昨年の年長組のことを、もつとよく見てお
かなかつたんだろう」「いろいろな場面で、先生方
にたくさんフォローしてもらつていたんだ」と初
めて気がついた。

保育後に、先輩の先生方とお茶を飲みながら、
子どもたちの話をたくさんした。そうするうちに、
だんだんと、自分や子どもの失敗、どうしようも
ないような姿も肯定的にとらえることができるよ
うになつた。何だか毎日が楽しくなつていつた。
初めて担任した子どもたちの修了式は、胸がいつ
ぱいで、言葉にならなかつた。

まさかの異動！　たつた六人の年長組担任に。 そしてこども園！？

だから、頑張って」という前職場の先生の言葉を
胸に、新しい職場へ向かう。はじめの二日間くら
いはホームシックのような気持ちだったが、何と
もユニークな六人の年長組と温かい先生方のお陰
で、密度の濃い充実した一年間を過ごした。もち
ろん、少人数学級で教師の存在が大きくなり過ぎ
てしまうなど学級経営の難しさもあつた。しかし、
日ごろから異年齢での遊びや活動を取り入れるな
ど、少人数の幼稚園ならではの面白さがあつた。
一人ひとりの言動からじっくり思いを探つたり、
子ども同士のつながりの深さを感じたりすること
ができた。そして私自身、二回目の年長組担任だ
つたことで、少し見通しをもつことができた。

そこは、二年後に近隣の保育所と統合され、「こ
ども園」になることが決定されていた。こども園
は、すでに同じ区内にあり、研修で行つたことは
あるものの「こども園」というものをまさか自分
が体験するとは思つてもいなかつた。園舎を新設
するため、小学校の教室が仮園舎になつた。幼稚

園の職員室になつたのは、障子や押入れのある、

小学校の和室だったというのも最初で最後の経験

だと思う。

前年度まで使われていた幼稚園は徐々に解体さ

れ、更地になり、新たに鉄骨が組まれていった。

三歳・四歳の時代を、解体される前の園舎で過ごして、いた年長児たちは、それを見てボソリと一言、「何か、思い出が壊れていくみたい」。その年から来た私でさえ、園舎から園章のエンブレムが外されるのを見て、胸がギュッととなつた。

そして、こども園化プロジェクトチーム、通称 P.T.にも参加することになった。園長、校長、役所の職員、既存のこども園の先生など偉い人ばかりの中、保育時間などさまざまなことを話し合いながら決めていった。私は難しいことばかりで、意見を言うよりも、「へえ、そうなのか」と話を聞くばかり。教育の観点からだとこうだけど、サービスの低下になるつて言わると……など、考

えさせられることも多かつた。

初めての三歳児担任。

幼稚園の閉園と、こども園開園準備

いよいよ幼稚園最後の年。何をするにも、幼稚園としては「これで最後」だった。すべてに全力で笑つたり怒つたり泣いたりする三歳児との初めての生活は、面白くて仕方がなかつた。ノートには、三歳児ならではの名言（迷言！）が増えた。一つの教室をパーテーションで分け、隣の四歳児と銭湯のように筒抜け状態だった仮園舎の保育室も、なぜか居心地が良かつた。

来年度になつたら歌えなくなつてしまふ、幼稚園の園歌。ピアノの伴奏は難しかつたけれど、明るい掛け声の入つた曲は大好きだつた。その園歌の記念CDを作るために、全園児（といつても約二十名）と職員でレコーディングを行つた。CDのレコーディングなんて初めてで、子どもも私も



ワクワクした。そして閉園式。歴代の職員や子どもたち、保護者が集まつた。みんな幼稚園が大好きだった。それがわかつて、思いの深さを感じた。

こども園化に向けての打ち合わせ内容も、だんだん具体的になってきた。各学年、幼稚園・保育所から一人ずつ出て、指導計画の作成。カタログから、遊具や棚などの用品選び。指導計画のねらいや内容の文言を話し合う時よりも、遊具や用品を選ぶ時のほうが、意外と、遊びや保育観の違いに気付いた。チーム保育（一学級を、保育士と幼稚園教諭の二人で担任することになっていた）でやつていけるのだろうかと不安にもなつた。

三月の修了式、終業式を終えると、新園舎への引っ越しにまっしぐら。ここに幼稚園があつたことが夢だったかのような勢いで、保育室や職員室は段ボールで埋まつていく。とてもアットホームだった二つ目の幼稚園。今思うと、こども園一年目は、この年にためたエネルギーで頑張れたのかかもしれない。

「こども園が始まつた！」

一学期は、何が何だかわからないまま、どんどん進んでいった。まず、勤務がシフト制になり、自分の学級の子どもが登園しているのに担任である自分がいないという状況や、子どもが遊んでいるのに自分は休憩に入るということを受け入れなければならなかつた。送り迎えの時間が人によつて違うので、毎日顔を合わせない保護者がいるようになつた。何と！ 日によつて、一歳児や二歳児の小さな子を担当するようになつた。とにかくわからないことが多すぎて、まるで一年目の新卒に戻つたような気持ち。毎日持ち歩いている保育ノートには、連絡事項を書くことが増えたようと思う。本当は、もっと、子どものかわいい一言や遊びの様子を書きたいのに、目まぐるし過ぎて、連絡や報告事項など、必要最低限のことを見れないようにするのに必死だつたのだ。

そして、保育士の先生と二人で、パワフルで個

性豊かな五歳児の担任をもつた。はじめは元幼稚園メンバーと元保育園メンバーで分かれて遊ぶことが多かつたが、いつの間にか分け隔てなく一緒に遊ぶようになつていった。短時間・中時間・長時間と一人ひとり保育時間が違うことや、同じ場に給食を食べる子と弁当を食べる子がいることも、「Aくん、今日帰るの何時？」ぼく三時！」「Bちゃんのお弁当かわいいね！」と、大人が心配するより子どものほうが柔軟に受け入れていく。子ども適応能力つて、本当にすごい！

正直に言えば、いろいろな保育者と話し合つたり実際に保育をしたりする中で、消化不良でモヤモヤとすること、違和感を感じることもある。でもそれは、「なぜ私は今、そのように感じているのだろう」「どうして私は、それを大切だと思っているのだろう」「子どもにどつては……？」と、自分の思いや考えを見つめ直すきっかけにもなつた。そうする中で、「ああ、こういう考え方もあるんだ」

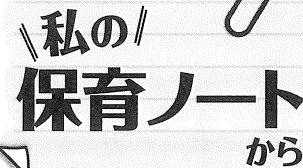
「こういうやり方もあるんだ」「やっぱり大切にしたいのはココだ」などと、自分なりに気付くことができた。

たつた五年のキャリアだけれど、驚くほど毎年、そして日々新しいことが起こる。その中で、子どもたちはどんどん成長していくし、いろいろな人や環境の影響を受けて、私自身も変わつていく。周りも変わつていく。しかし、こども園で働くようになつて、こんなにさまざまなことが変わつても、支えてくれる人や心に残る言葉、何よりかわいい子どもたちがいることは、変わらないんだと思つた。

数えてみると、十六冊目の保育ノート。今使つているノートも、もう少しでなくなりそうだ。次は、どんなノートにしようかな。新しいノートにはどんなことが書かれていくのかな。きっと私は、ワクワクした気持ちで、次のノートを選ぶ。

(東京都新宿区認定こども園)





保育の学び、教科の学び

満田琴美

「保育と教科教育」。子どもたちの成長と共に日々を過ごされる方ならば、一度は思いを巡らせたことがあるテーマではないでしょうか。自分の名前が書ける、漢字をたくさん知っている、足し算引き算ができるなど、最近では保育の中にも教科的教育が期待されていると聞きます。私は「塾の先生」として、学ぶ子どもたちを身近に見つめました。そこで出会った多くの子どもたちの姿から、勉強とは何か、学びとは何かを考えていきたいと思います。

ようこそ、私の教室へ

私は以前、個別指導塾の教室責任者をしていまし

た。個別指導塾とは学校のような一斉指導の形態をとらず、講師一名が生徒一名から数名を個々に指導する学習塾のことです。個別に対応しますので、学年も科目も、通塾回数も時間帯も、進度も難易度も、生徒一人ひとり皆、異なります。教室の規模は二、三十名から、大きいところでは二、三百名もの生徒たちが在籍し、小学一年生から大学受験を控えた浪人生までが通っています。講師、つまり勉強を教える「先生」はアルバイトの学生たちで、大教室では五十名以上もの大学生が所属します。大学の学部一年から大学院博士課程までの現役大学生が中心です。

当時、私は自分の教室運営の参考にと、他の教室

を見学させてもらつていました。その中に、今でも印象に残つている教室があります。

その日は教室が最も忙しい時間帯に訪ねることになりました。○○教室のスタッフたちは来訪者である私を迎えてくれると、すぐに中断した生徒との会話、講師への伝達に戻つてしましました。講師控室をのぞくと、次の授業のために待機する講師たちで和氣あいあいとしています。「座りますか?」「ゴチャゴチャしますけど、よかつたらどうぞ」。座席表を見ようと教室入り口の待合席に近づくと、足元に番犬のようなカバンを従えた男子高校生がスッと足を引つ込め、私を見上げます。「今日は何かのチエツクつすか」。教場を回ると、授業中の講師が「こんにちは」。その声に、中学生の女の子たちがパッと顔を上げ、私が声をかけるとニコッと照れ笑い。少し離れた席の小学生の男の子が不審者に気づき、「あの人だあれ?」と講師の耳元でささやいています。「誰だろうね、聞いてきてごらん」。講師の許可を握りし

めて走り寄つてきました。「誰ですか?」「△△教室から来ました満田先生といいます。よろしくね」「よろしくう」。目をクルクルとさせて逃げ帰つていき、講師に報告です。「よくわからなかつた……」

たつたこれだけのやりとりに、私はこの教室のすべてを教えられた気がしました。そこに集う人たちみんなが「ここは私の教室だ」と思つていること。他人同士なのに兄弟姉妹のような一体感。個別なのに集団の中にいるような安心感。それ違うだけで自然と会話が生まれる距離感。教室という大きな空間に包み込まれている温かさを肌で感じた訪問でした。

異年齢教育!?

年齢で考えてみると、六、七歳から十九歳までの教わる子どもたちと、十八歳から二十五歳前後の教える子どもたちが、当時三十前であつた私のもとに通つてきていたということになります。この二十年という年齢幅の子どもたちが毎日夕方から夜遅くま



で入れ代わり立ち代わり通つてきては、家庭でも学校でもない『第三の教育の場』に会します。そこでは自分と五歳も十歳も年の離れた人と知り合う機会があちこちに転がつていて、子どもたちは学校や学年に関係なく友達になり、仲良しの先生を増やします。高校や大学に合格し塾を巣立つと、数年後には講師になりたいと塾に戻つてきます。勉強を教えてくれた先生たちの姿を目標にしながら、かつての自分と同じ年ごろの地域の弟妹たちの勉強を見るのです。彼らは互いの中に『過去の自分』と『未来の自分』を見つけ、この小さな小さなコミュニティの中で「見せる・見倣う」、「教える・教わる」の学び合いを繰り返しています。教える資格をもつた大人はいません。けれども、彼らは確かに「学ん」でいます。二十年の開きがあれば、当然学習内容はさまざまです。また、一人ひとりの学習には家庭環境だけでなく、時代や政策も大きく影響しています。しかし、教科学習は単なるきつかけにすぎず、もっと大切なものを教え合い、学び合つてしているのではないか。

こうして変わらずに繰り返される学び合いの中に、何にも左右されない一筋の流れがあるのではないか。教科教育の世界から特別支援教育の世界へ、そして保育の世界へと順に足を踏み入れた私にとって、それは源流をたどるような足跡となつたのでした。

独りぼっちの学び

一筋の流れとして続く「学び」を探る試みを始めた時、ある出来事がフト思い出されました。私が間接的にかかわっていた教室でのことです。

A君が塾を休みがちであると□□教室のスタッフから相談を受けました。A君は週一回数学を習いに通つていた中学一年生です。小学六年生の三月に中學進学準備のために入塾し、地域の公立中学校に通い、残暑も一段落したころでした。学校の定期試験の成績は下がる一方で、塾で補うことで辛うじて学習を支えている状態に、A君のお母さんもここで通うのをやめてしまえばもう取り戻せないくらいにおくれてしまうのではないかと心配しています。A君

を担当する講師もスタッフと共に指導方法を模索していました。対応を考えあぐねているうちに、

A君本人から退塾の申し出がありました。彼は電話口で「学校の勉強だけにします」と切り出し、つぶやくようにこう続けました。

「塾に通つても学校の数学がわかるようになります。みんなはもう方程式の文章題をやつてているのに、僕は方程式ができないからみんなと同じプリントが全然できません。数学は積み重ねだから復習は大事だつてお父さんも言うし、僕も^{プラス}+とか^{マイナス}-の計算がちゃんとできなくちやいけないつてわかつてること、でも、僕もみんなとおんなじ勉強がしたいです」

こんなにもA君を追いつめてしまつていたことを、私は塾の大きな反省として胸に刻んでいます。指導要領をもたない自由な教育者として、私はいつたい何を目指してきたのか。私は特別支援教育を学び、A君に合わせた指導法の存在を知りました。けれど、たとえA君に正負の数の概念を理解させ、方程式を

習得させることができますが、A君の助けにはなれなかつたのではないかと思えてなりませんでした。

教科に閉じ込められた世界

A君の「みんな」という言葉。A君はクラスでの疎外感を精いっぱい伝えてくれました。数学という教科をどこか個人プレーのような科目だと思つていた私は、「みんな」を必要とする科目だと考え改めました。こうなつたら思い切つてすべての科目から教科の枠を取り外してみたらどうだろう。すると、次のような科目固有の学びの一面が見えてきたのです。

【国語】

言葉を通して人から人へと信頼をつなげていく学び
過去を生きた人、今を生きる人、その人たちが見、聞き、感じ、考えたことを一つひとつ受けとめていく科目。その作業は常に問い合わせ自分自身に語りかけ続けなくてはなりません。言葉を受けとめる手助けをしてくれる先生への信頼も築かれていきます。



【数学（算数）】 物事のプロセスを一つの真理に向かつて積み上げていく学び

言葉を超えた共感や一体感が生まれる科目。記号や図形の世界を操る先生はまるで手品師のようです。時間と空間を超えてみんなが同じ方向に向かつて進みます。近道しても遠回りしても寄り道してもゴールはたった一つ。たどえつまずいたとしても、ゴールへの道は確かに続いています。

【理科】 好奇心と想像力を引き出し、未来を生きることに夢と希望を膨らませる学び

見えてる世界を手掛けたりに、見えない世界を旅する科目。遠くて見えない、広くて見えない、深くて見えない、大きくて見えない、小さくて見えない……、見えないことだらけの不思議な物語です。生物無生物の垣根を越えて生命の存在と尊さを学び、自分自身の誕生の奇跡を見つめます。

【社会】 過去の人や年長者、世の中の人々を敬う心を育てる学び

人と人がつなぐ世界やコミュニティの存在を知り、自分もその一員であることを知る科目。人類の、世界の、日本の、社

会の、地域の、家族の一員である意味を考えます。自分が今ここにいることへの感謝の気持ちと誇りをもつて、これから的人生を豊かに送るスタートラインに立ちます。

【外国語（英語）】 異なるものや未知のものへのあこがれを育み、ふれあいや「ミニニケーション」の大切さを知る学び

自「」と他者の存在を認め、相手を思いやる心を広げる科目。それは目の前にいる人だけにとどまらず、地球の裏側にまで広がっていきます。自分の思いや考えを伝える方法を摸索しながら、全身を使って表現し、理解し合う喜びを体感します。

流れの先にあつたもの

そうです、教科の枠が取り払われた「学び」は、保育に携わる方々が大切に育んでこられた「学び」と、うり一つだったのです。私は保育を学び、ようやくその源流にたどり着きました。どの科目も、就学前の子どもたちが日常の保育や遊びを通じて五感で感じてきたことばかり。教科教育の視点で見れば、子どもたちは学びの階段を一段一段あがてくるよ

うでした。けれど、保育の視点で見たら、緩やかな上り坂を一步一歩のぼっていたのです。

保育の時期を終え、森羅万象を感じる心をもつて教科に出会った時、子どもたちは自分のこれまでの感覚としての学びを整頓するよう導かれていきます。「感覚としての学び」とは日常生活にちりばめられた、教科に分化されていない混沌とした学びです。学校は、その漠然とした感覚や感性を「思考」として整理するための道具——文字や数字、記号、知識の羅列——が与えられる場です。それらの扱いを教わり、懸命に操りながら、子どもたちは何年もかけて整頓していきます。そこにむなしさを感じた時、大人や仲間の存在が彼らの孤独な学びを助け支えるのです。

幼いうちに教科教育にはめ込まれ、学びの本質をなぞざりにされて育つたら、あるいは、豊かな感性があつてもその学びを共有できる大人や仲間がいなかつたら……。どんなに立派に外枠を積み上げて

いつても、空洞の学びはある時突然にその子の中で崩れてしまうでしょう。その子の今にふさわしい環境を用意する、これは学びを支える大人の使命だと考えます。大人が本質を忘れて枠組みだけに執着することは、子どもたちの中に育つべき「人としての真の学び」をないがしろにしていることと同じです。感じる心は長い時間を経て、思いやりや勇気に育ちます。感謝の気持ちや敬う心に育ちます。想像力や探究心に育ちます。失敗にくじけない心や忍耐力に育ちます。人を信じ愛する心に育ちます。一人ひとりを中心とした無限の広がりをもつていても、子どもたちはこれまでの世界と何ら変わらない場所として受けとめ、生き生きと学び育っていく。これこそが、保育、教育に共通して、私たち大人が子どもたちの中に育つてほしいと願う学びの姿ではないでしょうか。

(お茶の水女子大学人間発達教育研究センター)



からだ考

食べる つながる 育つ



命を学ぶ食農保育 (2)

保育者のあり方を問う

倉田 新

1 自然がやって来る

かつてペスタロツチは「生活が陶冶する」と言いました。幼児期の人間形成で重要なことは抽象的な知識ではなく、実際の生活の中での直接体験が極めて重要であるということでしょう。ペスタロツチは感覺器官を十分育てた後に理性の教育へと展開すべきと主張しています。私は「子ども未来財団」の保育所における教育のあり方に関する研究班の一人として「保育所における食育に関する指針」いわゆる「食育保育指針」を作成しました。これは厚生労働省の地域において適切な食育のシステムを構築するために「食を通じた子どもの健全育成（いわゆる「食育」の視点から）のあり方に関する検討会」と並行して具体的に作成した指針です。私が特に大切にしたのはこの豊かな直接体験と食農文化でした。食育を通して、耕すことなどを知らずして食べる現代社会の問題や、物流的にも意識や精神的にも離れてしまっている食と農の関係を見直し、日本の失われた文化を再構築する必要があると考えたからです。子どもたちに大切なのは教室の目の前で作物が育つことです。それは倉橋惣三先生の言う

「生活を生活で生活へ」ともつながることでしょう。幼児の生活をさながらにして、幼児の自己充実を図ることが幼児教育の本来のあり方であると述べているのですから、畑や田んぼが園庭にやつて来るのです。

フレーベルは『人間の教育』の中で「自分自身の庭を作ること。特に何らかの収穫をあげるために庭作りに従うことが、この年ごろでは重要な、いや全く特別に重要なことである。なぜならそこでこそ、はじめて、人間は、もちろんの成果が、有機的な精神の法則に従うとともに、必然的な制約を受けた方法で、自分自身の行為から生じてくるのを見るからである」と言っています。教室の目の前に命の環境があれば、園の田んぼで稻が根付くのと同時に、子どもたちや保育者の心の中にもしつかりと食農保育・教育は根付いていきます。日本の保育が他の国に誇れるものはコンピューターではなく、それは「自然との共生」と「命の環境」であり、美しい四季の中できつくりと熟成されて、命や感性を育むことであると思うのです。

2 豊かな育ちの環境を再生する

現代の子育て環境で失われたものは何でしょうか。それは地域の育ち合いの環境です。幼稚園や保育園がそうした地域のコミュニティを再生していくことはとても重要なことなだと考えます。『ぐりとぐら』の作者の中川李枝子さんは「ドリトル先生のような園長になって、たくさんの動物に囲まれた世界一の保育園を作りたかった」と言いました。「日本の社会を駄目にしたのは幼稚園の真っ平らな園庭だ。園庭は凸凹のほうが面白い。底なし沼があつてもいいくらいだ」と豪語したのは宮崎駿監督です。平らに整備されて小石一つ無いように

毎朝竹箒で掃いている園もあるでしょう。しかしそれでは子どもたちの育ちは無味乾燥です。大切なのは命の環境です。何もない園庭、それを蕭々と変えていくこと。すると農作物だけでなく、虫やカエルや鳥やたくさんの生物たちも集まつてきます。そればかりか食農保育を通して、多くの地域の人や社会ともつながり、さまざまなかかわりが生まれてくるのです。それらがすべて子どもたちの豊かな育ちの環境です。ビオトープ、ビオは命、トープは場所なのです。子どもたちの命が育つ場所、食農保育を通じて保育に自然や地域を取り込むことで、自分と物、自分と自然、自分と人、自分と社会との世界が豊かに展開され、そしてそのエナジーから自分自身の生き方を学んでいくのです。

保育者・教育者は貧困な命の環境を変えられるだけのエンパワーメント（Empowerment）を発揮しなくてはいけないです。それには私自身がどう考え、どう保育をデザインするのか、デザインしたらどう具体的に行動するかが大事なのです。考え方次第で環境は変えることもできますし、反対に考えなければ環境に流されてしまします。乗り越えなくてはならない最大の壁は常に自分自身の中にあるのです。

3 保育・教育をどう直す一つの視点

保育の五領域は生きる力の基礎を培う観点です。教育の五項目は「食と健康」「食と人間関係」「食と文化」「命の育ちと食」「料理と食」です。教育や食農を通して大切なのは保健・栄養指導だけではなく、従来の保育・教育の実践が子どもの最善の利益になつてているかをとらえ直すことでもあります。ゆつたりとした食農保育の実践は保育を子どもの生活本位の展

開へと活性化させるものであると考えます。食農保育を進めるにはすべての職員の知恵と経験と協力が必要です。何よりも子どもたちの生活の場に自然を開示することが必要です。

東京の郊外で食農保育を実践している八国山保育園では、稻を収穫した後の田んぼに今度は麦の種を蒔きました。十一月に入り園庭の田んぼや畑には一面真っ白な霜が降りていきました。そのころ、麦は硬い粘土層を割って小さな芽を出しました。早朝から園庭で遊んでいた五歳児の男の子が大声で叫びました。「すゞい！ みんな来て！ 麦が霜柱を持ち上げている！」。そうです。麦の新芽が厚い霜柱を地面からぐんぐん押し上げていたのです。集まつた子どもたちはその様子を見て「麦って、力持ちなんだねー」「みんなで持ち上げてるよ」と感心していました。「そうだね。こんなに小さくとも力を合わせれば大きな力になるね」「こんな力持ちの麦を食べるとどうなるのかな」と担任。「元気になる！」と子どもたち。早朝の大発見でした。

レイチエル・カーソンは『センス・オブ・ワンダー』の中で「子どもたちが、このような妖精からの贈り物に頼らずに生来の驚異の感覚を生き生きと保ち続けるためには、その感覚を分かち合える大人が少なくとも一人、その子どもの傍らにいて、われわれの住んでいる世界の歓喜、感激、神秘などをその子どもと一緒に再発見する必要がある……」と言っています。食農保育における保育者のあり方は、自ら耕すのはもちろん、子どもらの傍らにいて言葉を拾い、ドキュメンテーションを取り、温かく見守ることではないかと思うのです。

(東京都市大学)



続 心が育つということ

堀合文子先生に学んだこと

豊田一秀



夏号に向け、机に向かっている現在は、実は三月である。昨年、平成二十三年の四月十八日に堀合文子先生が九十歳で亡くなられて、はや一年が経とうとしている。この連載に哀悼文を執筆することがふさわしいかどうか悩む気持ちがあつたが、私自身の心が、堀合先生にどのように育てられたのか触れておくのも、「心が育つということ」という、この連載の主題に通じるのでないかと考えた。今回は思い出を交えながら、私が堀合先生に育てられたモノは何であったのか、書きつづりたいと思う。

堀合先生はある意味で、日本で最も有名な保育者の一人であつたといえる。倉橋惣三先生から直接の教えを受け、昭和十五年よりお茶の水幼稚園（正式には東京女子高等師範学校附属幼稚園）で教鞭をとられた。

昭和六十一年にお茶の水女子大学を退官された後も、十文字幼稚園で担任をされた。その後、八十歳を過ぎても現役でいらした堀合先生は、まさにその一生を「行（ぎょう）の人」

として通された保育者である。

この間に、堀合先生に育てられた保育者は数限りない。当時、お茶の水幼稚園で毎週行われていた保育参観には、毎回、保育室に入り切れないほどの参加者が全国から集っていた。また、大学やさまざまな講習会は言うに及ばず、外国にも行つて保育の指導をされていた。

私は、昭和五十二年よりお茶の水幼稚園に奉職したので、堀合先生の四十六年にわたるお茶の水時代の中、最後の九年間をご一緒させていただいたことになる。その中で、最初の二年間、私は、副担任として堀合先生のクラスで勉強する機会を得た。先生の指導を受けた保育者は多いと思うが、二年間もの間、先生のクラスで教えを受けた者は私ぐらいではなかつたかと思う。

厳しさ

堀合先生の保育を間近に拝見して、初めに感じたことは「厳しい先生」ということであった。堀合先生は、細かく子どもの世話をされ、製作の援助をされるが、直接にはあまり子どもと遊ばない。堀合先生が「それはしないのよ！」と言うと、子どもは先生に従う。先生にはある意味での権威があつて、子どもは先生に口答えするようなことはなかつた。私には、堀合先生の前では、皆、良い子になつているように感じられたのである。

保育の深さについて何もわかつていなかつた当時の私は、皮相的な意味で、子どもの近くにいたいと考えていた。子どもと遊ぶのが楽しくて仕方がなかつたのだ。そんな私であつたから、先生は、子どもと遊ぼうとする私をしばしばたしなめられた。「子どもは、遊んであげて

はダメなのよ!」「もつと、目立たないように子どもと遊びなさい!」

このことに関連して、こんな一事もあった。子どもたちが朝顔の苗を鉢に植えようとしている時である。鉢の底にある水抜きの穴から土がこぼれないように、小石を穴の上に置くのだが、先生は、ちょうど良い大きさの石を探してくるように子どもに話した。

少し甘えん坊の女兒が私のところに来て、石を見つけてと言うので、私は深く考へることもなく、欠けて使えなくなつた植木鉢を落として碎くと、良い大きさの破片を与えた。それを見て、堀合先生はあわてて飛んでみると、すぐに、私に破片を片付けさせ、独り言のように、あなたは私の保育がわかつていないと言われた。せつかく、子どもに考へる機会を与えたのに、私が、あまりに安易に子どもに応えたことへの先生の憤りであった。私はそれほどに初心者であつたのである。

信頼関係の上に立ちつつも、子どもの遊びの世界に立ち入らないように細心の注意をされる先生の姿勢は、晩年、いつそう強くなつたように思う。その理由として、子どもを取り巻く生活全般が大きく変わってきた点を挙げられている。

子どもが、「子ども時代」を生きられるような環境が貧しくなり、自分で考へる力が減少してしまつた結果、子どもの「遊ぶ力」が弱くなり、大人の意向に対し敏感になり、すべてにおいて受身になつてきている……。このような状況にある子どもたちを保育するには、以前のような接し方では対応し切れない。先生は繰り返し話されている。

このようだ、堀合先生の子どもとの距離感の変化は、時に保育関係者に誤解も与えてきたように思う。保育者はもつと子どもの近くにいて、教え、一緒に遊ぶべきではないのか……。

といったたぐいの批判である。

やさしさ

子どもとあまり遊ぶことのない先生であったが、先生が子どもをかわいがらなかつたのかといえば、そのようなことは決してなかつた。今、思うに、先生は強い意志と使命感で、子どもと遊ぶことを「我慢」していらしたのだと思う。

五歳の三学期、庭には沈丁花（ジンチヨウゲ）のつぼみが膨らみ始め、子どもたちは、園庭でそれぞれの遊びに没頭していた。春の日差しの下、さまざまな遊びが花開き、何とも言えない穏やかな調和に満ちている午後であつた。子どもたちに、お帰りを告げに行かれた先生は、七〇センチほどの高さの、斜面の土留めコンクリート壁で遊ぶわんぱくグループのところに行かれると、子どもに背を向けられ、一人をおんぶして保育室まで連れていかれた。それを見た子どもたちは、われもわれもと集まつてきて、壁は子スズメが電線に止まつてゐるようなありさまとなつた。先生は、子どもを一人ずつおんぶされでは、ニコニコと保育室まで行き来された。子どもたちのうれしそうな顔、顔……。私は、うれしいような気持ちとともに、先生と子どもたちを邪魔してはいけないような気持ちで、遠くから見守るばかりであつた。私の出る幕ではなかつた。こんな、堀合先生と子どもたちの光景を目にしたのは、おそらく私だけだと思っている。

卒業式が近づいたある日、見学に見えていた保育者が保育後に先生に質問した。「こんなに

手塙にかけた子どもたちが卒業してしまって、先生は寂しくありませんか?」。先生は、さも意外なような顔をされて、「アハハ、四月になれば、また次のが入りますからね!」と答えられた。この答えには驚かされた。子どもたちとの別れが近いことに、少し感傷的になつていた私だったからである。

そして、卒業式の当日、朝、子どもと保護者が部屋に集まつた時、「ご卒業おめでとうございます」と言われた後、少し間が空いて、先生は突然、ワーッと声を出して泣かれた。それは、あまりに唐突で、子どもも父母もあっけに取られ、「もらい泣き」もできない感じであつた。数秒後、先生は泣きやまれ、何もなかつたかのようにその日の予定など話されて、私たちは子どもたちと大学講堂へ向かつた。

その後、式の間も、それに続く謝恩会での席でも先生は泣かなかつた。目を赤くはらしている父兄や子どもをよそに、先生は終始にこやかであった。この一事の中に、先生の、経験を積んだ保育者としての矜持を見たように思つた私であつた。

堀合先生は、倉橋先生の「子どもたちと野原に寝転んで一緒に空を見る、保育はそれで良いじゃないか」という言葉が大好きだと、何度も語られている。

常に自分に厳しくありつつ、子どもとの「今」を真剣に生き続けた先生であつたと、今にして思う私である。

(玉川大学)

子ども学探訪

編輯顧問
倉橋惣三
と
キンダーブック

明治・大正の絵雑誌から キンダーブックへ

浜口順子

キンダーブック以前の絵雑誌

今、手元に昭和五十四年発行の雑誌『太陽』(No.91)がある。「絵本」特集で、明治・大正・昭和に発行された絵雑誌がカラー刷りで紹介されている。キンダーブックが発行された昭和初期までにどんな絵雑誌が世の中に回っていたのか、ざっと見渡してみる。明治初期は木版草双紙、そして明治中期の銅版草双紙。図柄こそ江戸情緒たっぷりの浮世絵風、昔話や戦記物、芝居断など題材とした、ちよんまげや日本髪の登場人物、前近代的な雰囲気たっぷりである。表紙は赤、黄、緑、青、黒のどぎついほどの原色刷り、墨筆で描かれたような太い輪郭線、舞台から大見得切ってこちらにせり寄るような派手な演出、女子供をこれでもかと喜ばそうとするサービス精神がひしむと伝わってくる。

現代に近い、なじみやすさが感じられるようになるのは、明治三十年代以降に刊行された、

子どもを特定の読者として意識した絵雑誌からではないか。そこでは子どもが子どもらしいバランスの体型と表情でかわいらしく描かれ、表紙の中心に据えられるようになつてくる。『お伽絵解こども』『少年智識画報』『少女智識画報』『幼年画報』『家庭教育絵はなし』『幼年の友』などの他にも、多くの子ども向け雑誌が発行され、当代の画家の挿絵が入つた、教育・訓育的内容のお話絵本が続々と刊行される。そこに垣間見える「智識」や「教育」というキーワードといい、そのかわいらしい子どものイメージといい、すでに明治初期のそれとは違う、近代的パラダイムに移行しつつあることは確かであろう（ちなみに、本誌『幼児の教育』が『婦人と子ども』という表題で創刊されたのもこの時期、明治三十四年であった）。

時代は二、三十年下るが、キンダーブックが企画された当時、「知識の宝庫」という意味で『チコ』という誌名の案も出ていたという（『フレーベル館一〇〇年史』二〇〇八年 p.47）。現代でこそ、「知識」を重視する保育、などと言うと、早期教育の表層性や質の低さを揶揄するようなニュアンスで受け取られがちだ。しかし、科学主義が台頭する直前の当時においては、「智識」という言葉には、もつと、知性の基盤たる素養を小さい子どもに供することへの大人としての口マンが込められ、得てして大人の視点からの芸術文化に耽溺する弊もあつたのかもしれない。

倉橋惣三と、キンダーブック以外の絵雑誌

大正期に入ると、モダンで洒落たミニチュア絵本や、しけけ絵本、布絵本なども発行され、鈴木三重吉らの『赤い鳥』以外にも芸術性の高い絵雑誌が群雄割拠する様相を呈する。大正

四年に創刊された『日本幼年』に倉橋は監修者としてかかわったが、その意氣込みが『婦人画報』（一〇五号 大正四年）に「新しい読物」として寄稿されている。産業化都市化の中で家庭教育の担い手としての「主婦」層が出現し、「お母様方」と呼ばれつつ、教育者及び教育材購買者として注目されていく時代である。「（雑誌は）大人のものであるならば万一多少の誤りや欠点などがあつても、読者の理解力によつてその弊を免れることができます、子供は理解力で弊を矯めることができません。子供に於いてはなんら重きを置くに足りないような局部的の誤謬も甚だしい弊害のもととなります。」（p.50）

さらに倉橋は、幼年雑誌には高い芸術性が大事であると言う。「殊に近世教育思潮の一たる美的教育論のような論調から言えば、一冊の絵画雑誌一枚の絵といえどもその価値は軽んずべからざるものであります。（中略）また社会においても、よくこの積極的意義を理解して、この方面的の画家の努力に対しても十分の尊敬と認識を払うようにしなければなりません。」

（p.51）

大正十一年に創刊された絵雑誌『コドモノクニ』は、各雑誌で活躍していた岡本帰一、初山滋、武井武雄ら著名な画家たちを結集して、子どもの世界を言葉にして芸術的誌面に融合させた絵本を作り出し、高い人気を博する。倉橋惣三はこの雑誌に、北原白秋、野口雨情、中山晋平らと共に顧問としてかかわり、自らも「水まきさん」「しんぶんやさん」など働く人の様子を子どもの目の高さから詩にしたものや、ユーモラスな遊び唄なども作った。どれも子どもの目の高さが感じられ、またそのイメージに合った挿絵に包まれている。

しんぶんやさん

くらはし

しんぶんは だれが もつてきて くれるのでせう
いつも わたしの ねているうちに
きっと げんかへ おいてある。

はなこさんに きいてみても
たらうさんに きいてみても
だれもしつて いるひとはない。

さつき ごもんで あそんでいたら ゆうかんやさんが
かけてきて ほいと げんかへ なげてつた。

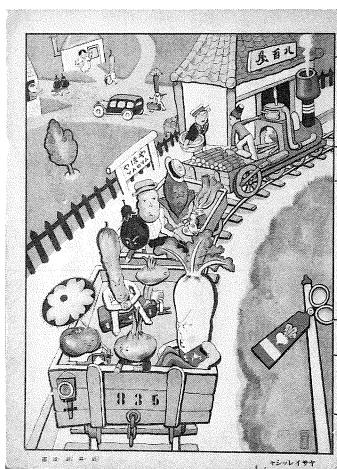
「あら あさのも あそたなの」といつたらば
「へえ」とわらって かけてつた。

おとなりへ

また おとなりへ。

また また そのおとなりへ。

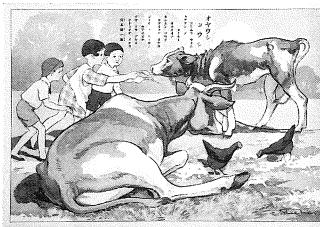
(岡本帰一 絵)



▲武井武雄 画
(「ヤサイレッシャ」
昭和 11 年 7 月)



▲清水良雄 画
(表紙「セカイノイウギ」
昭和 7 年 6 月)



▲岡本帰一 画
(「オヤウシコウシ」
昭和 5 年 6 月)

観察絵本というジャンルの登場

さて、「太陽」の絵本特集における「昭和」のページは次の見出しで始まる。「『観察絵本 キンダーブック』は、初めての幼児教育用絵本。幼稚園での直接販売という新しい販売ルートを開拓した。」そして、「昭和に入つても、『コドモノクニ』の人気は高かつたが、対照的な絵本が昭和二年に誕生する」とある（p.39）。

キンダーブックが、大正十五年に公布された幼稚園令において新たに追加された保育項目「観察」の実施のために計画されたことはよく知られている。その背景には、大正期の童心主義や過度な芸術主義に傾いた幼児雑誌への批判、また当時の国家的な科学教育への関心の高まりもあつた。しかし、そこに描かれた絵は、客観的科学的なものばかりではなく、依然として子どもの目線と関心をいつもとらえていた。岸田衿子の回想は、そのあたりの子供心を語っている。「キンダーブック、コドモノクニに限らず、昔の絵本を思い出すと、まず清水良雄や武井武雄の絵が浮かんてくる。武井調の絵には、何にでも顔が描かれていて、ニンジンにも、木やお阳さまにも顔があつた。それが子どもにはうれしいことらしい。それぞれの好き嫌いもあるだろうけれど、子どもにとって絵本の絵は、細かくすみずみまで描かれ、それでいて大小の対比がはつきり描いてあることが大事なようだ。いつぴきいつぴきの蟻や虫や、絵のすみのほうまで、たんねんに子どもはたどる。」（前掲『太陽』p.41）

—— 続く ——

（引用文は、一部現代仮名・文字遣いに適宜書き換えた。）

（お茶の水女子大学大学院）

講演

「現代の保育制度変革の中で起こっていること」

第三回 お茶の水女子大学ECCOE「子ども学シンポジウム

(一〇一年十二月十八日) から

渡辺英則

(構成／浜口順子)

幼保一体化の波の中で

港北幼稚園と ゆうゆうのもり幼保園という認定
こども園の園長をしております渡辺です。横浜市は、
平成十五年に子育て支援事業本部を立ち上げ、三年
間で保育園の定員を八千人増やすといつて毎年四十
ぐらい保育園を作るという待機児童対策の真っただ
中で、幼保一体化施設を公募しました。社会福祉法
人を設立し、幼保一体化施設を平成十七年に立ち上
げました。

認定こども園では、保育園の子もいれば、幼稚園
の短時間の子、幼稚園の預かり保育利用の子もいて、

子どもによって保育料が違うし、申請書類も違う。
監査も別だし、入園の仕方も違えば卒園証書も違う。
現場からするとかなり大変な違いだと感じています。

今は、子ども・子育て新システム検討会議作業グル
ープの、こども指針（仮称）ワーキングチームに入っ
ています。会議に出て感じたことですが、総論では
チルドレンファーストとは言いながら、全体的には
待機児対策とか、女性が働いてくれれば年金も税金
も助かる、みたいな話に傾いていいのか。その中で
子どもや保護者が孤立していることや、子どもの危
機を直接受け止めている現場の先生たちの悩みとか
が十分考えられているのか。親の就労時間を長くし

て対応するといつても、ゆうゆうのもり幼保園で閉

園時間が七時半を過ぎて迎えに来たお母さんに、「保育時間が八時まで延びたら楽になる?」と聞いても、「いや、先生、今七時四〇分とかに帰ってきて園に迷惑かけているけど、これが八時になつて、家で九時に子どもとご飯食べて、翌朝また七時ごろ家を出でこなきやいけないつてことになる。そうしたら私の生活は破綻します」と言う人がいました。本当にこのような長時間子どもを預ける施策が増えているのか? それを続けるのか? と思っています。

子どもが本当に育つといつ」とは

今、横浜市の公立の保育園ではブランコの下にランナーを置いておくところが多いです。たぶん今、幼稚園や保育園で困っているのは、けがや子ども同士のトラブルと、保護者から園へ寄せられる苦情の処理です。

苦情などのトラブルが起こらないことを優先してしまう。でも危ないことをすべて避けていて、子ど

もが本当に育つのでしょうか。

入園説明会の場で、「公園でブランコに乗つていて、他の子が乗りたそうにしていたらどうしますか?」と聞くと、八、九割の保護者は「代わつてあげなさいと言います」と言う。でも僕らが育てたいのは、「僕はずーっと待つていたからもうちょっと乗りたい」とか「小さい子が来たから代わつてあげよう」というような、自分で判断できる子どもです。「ブランコは二十数えたら交代ね」とか「滑り台の逆さ登りはだめね」とか、園でルールを作れば確かにトラブルはなくなるかもしれない。でも、園を離れて、いろいろな子どもたちが公園に来た時に、自分たちで話し合う力がなかつたら上手に遊べないわけです。

『ガンピーさんのふなあそび』(ジョン・バーニンガム作 光吉夏弥訳 ほるぷ出版)という絵本があります。ガンピーさんというおじさんの舟に、子どもたちや犬やヤギなどの動物が次々に乗り込んでくる。舟の上で子どもたちはけんかしたり、ニワトリは羽をパタパタやつたり、ヤギはメーメー鳴いたり、

牛はのしのし歩き回ったり、やらなければいいことを全部やつて、舟はひっくり返つてしまふ。乗つている動物と子どもたちは必ずぶぬれになるが、洋服を乾かして、土手を歩いてガンピーさんの家に行つて、お茶を飲んで帰ります。ガンピーさんは「ほら言つたじやないか」とか「ちゃんと注意したぞ」ではなく、「また乗りにおいで」と子どもたちを帰す。失敗した経験があるから、次に乗る時はもうちょっと自分たちでどうしたらしいか考えるはずです。子どもはけんかするから子どもであり、二ワトリは羽をパタパタやるから二ワトリなのです。それを禁止してしまうということは個性を失うということです。幼稚園や保育園でも、それぞれの子が自分を出し、周りとも多少のトラブルを起こしながら、でもそこどうしたらしいかを子どもたちが学んでいく。それが保育園や幼稚園の役割ですよつて言うには、すくいい本だと思う。

保護者の、「子どもを預かってもらえばいい」という意識からどうやって脱却するかが問われています。

長時間保育になればなるほど、離乳もおむつを外すことも保育園に任せますっていう話になりやすい。これで本当にいいのかどうか。親が忙しいと、子どもの気持ちを受け止められないで、「あんた何ぐずぐずしてるの」と子どもを振り回すこともある。また、親同士の関係が厳しいと、「先生たちが見ていてくれなかつたからトラブルになつた。ちゃんと見ていてくれ」というような苦情になる。本来的には、親同士が親しくなついたら、「昨日ごめんね、たたいちやつたみたい」「いいのよ、お互い様だから」というような話で済むことでも、園は管理的にならざるを得ず、子どもの生活を狭めてしまうことになる。苦情が出ないよう保育をしろとか、やみくもに第三者評価を受けるなどの指導があつたりとかすると、子どもたちの長時間の生活は（適切な表現かわからぬけれど）

収容所化されていき、けがさせないとかけんかさせないとかにすごくエネルギーを使って保育をしてい



くことになりかねない。それで本当に子どもは幸せなのでしょうか。

保育園に直接契約が導入され、企業がさらに参入してくるようになると、体操や絵画を指導します、長時間でも預かります、一日中英語で過ごします、というような、いろいろな園が出てきます。そうなると、それに対抗するような幼稚園とか保育園も出てくる。「預かる」という流れと、「小学校へのスムーズな接続」という流れの中で、幼稚園や保育園の保育の本質的なところが狭められていくような感じがあります。実際、子どもは遊びの中で育つていくということをどうやって保育関係者、保護者、そして小学校の関係者などに理解してもらうか、そこが問われています。

「子育てが大変だつたら、うちでちょっと見てあげるよ」とか、「一緒に夕飯食べない?」など、地域の中で子どもたちが育つしていく関係をどうつくっていくかということを考えないと、子どもは育つていかないのではないかという感じがしています。

保育時間のデザイン

認定こども園の保育を考える上で、九時から二時までの時間はやはり大事だと思っています。保育園的な子もそこには来てほしい。総合施設化の中で、子どもを預かる総時間数を決めて、夜だけ来る子がいるとか、朝だけ来る子がいるとか、土日に来る子がいるとか、子どもを預かる時間を保護者が勝手に決めるようになつたら、子どもの集団性はズタズタになつてしまふでしょう。九時から二時までの幼稚園的な時間をどうするか。その一方で、長時間保育の子どものほうが育つとしたら幼稚園的な子はどうするのか、という疑問も起ころ。今、早く家に帰つても遊ぶ友達や祖父母もいなくて、家に一人でいるよりは園にいたほうがいい、というような問題も、秋田の方では起こっています。

どのような保育を組み立てるのかを考えなくてはなりません。土曜日の行事が多かつたりすると、保育者の働き方もたぶん違つてしまつて、これもないのではないかという感じがしています。

難しい。新人の先生が多くなつて結構忙しくなると、丁寧に保育を振り返らずに、何とか無事に保育を終わらせるような日々になつてしまふだろうし、ちよつとしたけんかやけがあつたといつても、誰がどこでどういうふうにそくなつたのか、二時で帰る幼稚園児がたくさんいる場合、長時間担当と短時間担当の保育者との連携が難しくなる。横浜で比較的多い認定こども園の形は、幼保の施設がお互いに独立していく、幼稚園がある時間帯だけ、保育園の子が幼稚園に行き、また保育園に帰る、というもので、このほうが運営しやすいです。

ゆうゆうのもり幼保園での保育の流れ

朝、保育園に登園し、九時ぐらいになつたら幼稚園に行つて、二時ごろまた保育園に帰るという、家庭の補完的な形で保育園を活用していくと、割とうまくいきます。二つの建物が独立してあって、こつちはあくまで保育園、別の建物はあくまで幼稚園つていう枠を守るからです。保育園の先生たちは、例

えば夏休みとかに幼稚園の先生が手伝つてくれると私たちも楽だわ、って感じるし、幼稚園の先生たちは、保育中、子どもの人数は増えるけど保育園の先生がフリーで入つてくれるから助かるというような関係ができます。ただし、このような認定こども園は、あくまでも幼稚園と保育園が独立してあるということが原則です。

子どもの側から考えて、いつた時にはどうか。ゆうゆうのもり幼保園では、九時から二時を「光の時間」、それ以降を「風の時間」と名付けて分けています。その前後、九時前は「おはよう保育」、夕方五時か六時以降は「ぬくもりの時間」と呼び、ここは子どもの数が少なくなるので、より家庭的な雰囲気を大事にしようと思つています。幼稚園が四時間とか五時間という保育時間なのは、家庭や地域に子どもの居場所があつて、帰宅後に子どもたちなりの生活が保障されていたからです。それが今はできなくなつてきている。それなら園の中にそういう地域的な生活をつくろうというのが「風の時間」です。

この写真（省略）は二歳児が流しそうめんをしているところ。もともとはおやじの会がやつていた流しそうめんが、保育の中に入つてきて、食べることが楽しくなる。三歳児以上が遊びの中で育つしていくという場合、例えば小さな集団が楽しい遊びをしていると、徐々に大きな集団になつていつたりすることがあります。昨年ですが、年長の子どもたちがケーキを作つていたら、乳児の子たちが来て一緒になつてケーキ屋さんをやつたりもする。楽しいことが起つているとそこに乳児も保護者も寄つてきて、子どもたち同士が育ち合うことをどう実現していくかが大事なんだろうと思います。

風の時間の中では、小学生ボランティアが下校途中にランドセルのまま園に来ます。お母さんに園から自分で「今からボランティアやる」って電話をして、ドッジボールしたりセミを捕まえてくれたりして、お兄ちゃんお姉ちゃんとしてのカッコよさを見せてくれる。お母さんたちもボランティアでおやつを手作りしてくれたり、絵本を読んでくれたりして

かかわつてくると、地域が園の中につくられていくことになる。今年一番の人気は、いわゆる「森の幼稚園」をまねて、風の時間担当の先生たちが毎日近くの森に行つて、いろいろな遊びの経験をしたことです。かけ登りで五歳児が一生懸命、三歳の子たちと手をつないで面倒見てあげていたりしました。

保護者のあり方について

昨年、ゆうゆうのもりのお父さんの知り合いが、田んぼを貸してくれました。それで親父の会みんなで行つたら、お父さんお母さんのほうがワクワクしていく、子どもはみんなドロドロになりたくないつて嫌がつていた。でも大人が面白いからつて結局みんなで入つて、泥をかけ合つて記念写真撮りました。田植えをして、稻刈りをして。素朴ですけど、そんなことが本当は子育ての中で大事だつていうメッセージを出すことが必要だらうなつて思つているんです。幼保で保育料が違う中で、ゆうゆうのもりでは、二歳までがずっと保育園で来て、三歳になると、幼

幼稚園の人たちがそこから五十人くらい入つてくる。全部で六十人ぐらいが一緒になると、何かあるたびに「私たちは保育園です」「私たちは幼稚園です」という話になりやすい。この幼保の壁が、僕の中では七年ぐらいやつてきた中で結構難しかった。その壁をそのままにしていくと、小学校に入った時に小学校の先生も大変だろうと思います。幼稚園と保育園という違いを強調するのではなく、ゆうゆうのもりの子どもとして育つとか、地域の子どもとして育つとか、そういう大人の意識とか協同性を大事にしないと、なかなか子どもが育つしていく環境はできてこないだろうという気がしています。

保護者には、働いていようがいまいが、参観で見に来るだけでなく、保育に参加してもらうよう伝えています。園を開く中で、子どもや保育への理解を深めてもらうことが、本当はこれから評価だろうと思います。子どもを通して、大人も、自分の世界や生き方が広がっていく。その楽しさを感じたり、地域の中で子どもたちみんなが育つていくと、

幼稚園の人たちがそこから五十人くらい入つてくる。全部で六十人ぐらいが一緒になると、何かあるたびに「私たちは保育園です」「私たちは幼稚園です」という話になりやすい。この幼保の壁が、僕の中では七年ぐらいやつてきた中で結構難しかった。その壁をそのままにしていくと、小学校に入った時に小学校の先生も大変だろうと思います。幼稚園と保育園

とを考えていこうとする」とが、本来的には子育て支援としての総合施設の役割だらうと思つています。
最後に、家庭で子育てる選択をしたお母さんたちのこととも、もっと社会は大事にしてほしいです。

この前、専業主婦のお母さんが、市から月に七千円出ていた赤ちゃん会の運営費が減らされるか無くなるつて話をしました。その一方で、0歳児のお母さんが保育園を選択した場合、運営費などの経費が月四十万円以上かかる。待機児対策というのは、保育園を作り続けることだけじゃなくて、0・1・2歳児の親たちのいろいろな要望に対しても丁寧に受け止めないと本当はおかしい。地域の中で子育てをしていることは損だ、というイメージが出来てきているような感じもあります。子どもが小さい時は家で育てたいと思う人や、子どもが小学校に入ったら働きたいと思う人が、そのことを実現できるようなトータルで子育てを考えられる仕組みを考えなければ真の子育て支援ではないと思います。

(横浜市港北幼稚園・ゆうゆうのもり幼保園)

渡辺久子先生のインタビューから —もう一つの大切な話・遊び—

ダーリングフル規子

「元気」という題で始めた前回(春)号のインタビュー。元気はもとより、本当に多角的な視点・話題

が、糸に手繰り寄せられるように出てきました。そのお話の中で、皆の中でもみくちゃにされながら遊びに夢中だった幼年時代の渡辺先生、手芸が好きだった渡辺先生等、すてきなご本人の子ども時代に触れながら、専門家としてだけでなく、そのような子ども時代を過ごしたからこそいえる遊び論だつたり、その遊びを守る保育者論や社会論にも触れることができました。前回のインタビューには載せ切れなかった、そんな大切な話を紹介します。

子どもが遊ぶということ

子どもの「元気」を語る時、いろんな方面に話が向いていつても必ず戻ってくるところがありました。それは遊び。私たちは、遊びが大切だとわかついても、遊びそのものについて考えていくことは、忙しさを理由についつい延ばし延ばしにしていたりします。しかし渡辺先生は、「本来の子どもの体験を見据えた遊びの見直しをしていく必要がある」と提案しています。なぜなら子どもの遊びは人格の土台づくりであり、人類の未来にもかかってくるほどのものであるからです。渡辺先生がここでいう遊びとは、

身体ごと本当に遊び切ったという体験ができるもので、私たち大人は子どもたちにそのように遊べる機会を与えなければいけない。子どもに、大人よりももっと大きい世界、例えば大自然を見せて、その空の下で気持ちが良くなつた時に、自分たちでスケールの大きいワイルドな展開をしていく。そして、一人ひとりが心と身体にいい遊びの体験を染み込ませていく、そんな遊びが絶対必要だというのです。

遊びが危ない?

遊びの大切さの話につながつていったのは、実は日本の子どもの発達が危ないのではないかということからでした。渡辺先生の恩師で成育医療センターの初代総長だった松尾宣武氏やカンボジアの地雷撤去を行つている石井麻木氏はそろつて、アジアの子どもたちの目は生きていると言われる。その子どもたちのしなやかさ、目の動き方、手の動かし方等は明らかに私たちが都会で見ている子どもたちよりも発達している。決して経済的には豊かな国ではない

けれど、一歩、ミルクがあつて、ちゃんと子どもがかわいがられて、たくさん子どもがいる所に行けば、本来の子どもの姿があるというわけです。子どもが自分の中からきらきら輝いていくための体験。それを日本の子どもたちにも取り戻してあげる必要があるわけで、渡辺先生はそのこと 자체は難しくないけれど、本気でつくるないといけないと断言します。ではどうすればよいのでしょうか。

社会全体で子どもの遊びを保証すること ——フランスの場合

昨今の社会が子育てをどのように考えているかを見てみると、都会化社会の中でいかに効率よく子どもを育てるかに走つてゐる傾向があります。そんな中、一九八九年にパリのフランスの議会（渡辺先生はその時アジアから唯一参加メンバーとして呼ばれました）で、三日間熱心に議論されたことがあります。それは働いている母親の子どもの発達の問題、つまり、フランスではこれから女性は皆働くから、

その時にフランスの保育園をどうするかということでした。一つの主張は、パリの駐車場並みに子どもの遊び場を増やせということ。つまり、よく知つていて、自分の陣地がつくれて、やつていいことない子どもの空間をつくる必要があると言つたのです。そして、今のフランスはそれを実現しているようだと渡辺先生は感心します。パリの都会化され大人中心の世界がこの二十年間で変わりました。それはすごいことで、例えば、子どもの場所がいっぱいあらし、育児が大変になつた時に、携帯電話の連絡一つで税金で雇われた人が応援に来るというのです。

社会全体で子どもの遊びを保証する」と ——日本の動き

日本でも、子どもの活動が保証されていた時期はありました。それは一昔前の日本での、原っぱとか広場とか山とかという所。渡辺先生は、おそらくそこにお年寄りたちが子どもの安全を守るために目を

光らせていて、子どもたちはかなり温かく守られていたんじやないかと言います。

では、現代はどうでしょうか。日本の子どもたちが子どもらしく発達していくためには「本来の遊びが好きな子ども」にその遊びを与えれば大丈夫、と渡辺先生は、東日本大震災後、放射線による被害も受けている福島での「郡山市震災後こどもの心のケアプロジェクト」の例を出して話してくれました。

このプロジェクトには先生もかかわっているのですが、プロジェクトの中の一つに、大型遊具で遊べる広場“PEP Kids Koriyama”があり、大型遊具（ボーネルンド社からの提供）が子どもたちを夢中に遊ばせてくれるというのです。それらの遊具は、昔だつたら危なかつたかもしれない、例えば高いがけから飛び降りるというような昔の子どもの遊びに近いものが、安全な形ができるようになつたものであり、シャワーのような汗をかきながら全身で遊び込めるものというわけです。屋外で遊べない福島の子どもたちや子育て中の家族にとつて、そもそもしかした

ら、実は日本中で必要としている遊びがここにはあるのかもしれません。

もう一つの例は、天野秀昭氏（大正大学特命教授、NPO法人「日本冒險遊び場づくり協会」副代表）の、基地遊びができるような子どもの空間（プレイヤーク）を取り戻そうという活動です。子ども同士で安全に冒險できる空間、子どもの領分で社会性が築かれていく空間を保証することが大事だというわけです。そしてその時、私たち大人はしっかりと子どもの特性をつかんでいくことが必要だと渡辺先生は天野氏に同感しています。それは、子どもはまづ探索が大好き、つまり危ないことが大好き。それから汚いことや破壊することが大好きで、そこから新しく何かを作り出す。そして子どもたちはよく感動したりエキサイトしたりして腹の底から思わず声が出る、だからうるさい。この危ない・汚い・うるさいの頭文字A・K・Uを続けて読むとAKU、つまり「悪」だと。これが子どもの特性。だから、悪に対する私たち大人の見直しが必要だというのです。

兄弟体験がたくさんできた子ども時代を育つてきただ人が減っている今、私たちは意識して子どもたちにいい遊びの空間をつくってあげなくてはいけません。それも、渡辺先生のいう「子どもの発達に必要な立体的な一つの空間」がいる。そのためにも私たち保育者は、先生のお子さんが通っていた「ぼーぼー子どもの家」ガルソーのエミールを教科書としていたように、前述のAKUについて考えていくこともそうですが、子どもという人間の土台をつくるという深い保育意識、哲学をもつて環境づくりを考えることが重要に思います。

そして、全身を使っての遊びはもちろん必要だけれど、その一方で、手芸が本当に大好きだった渡辺先生は言います。

本当に好きなことが見つかるということは人生の一つの、そして大事な強みだと。

最後に

幼児の教育

110年の散策

56 7 28 109 110

阪神淡路大震災関連の記事から(2) 第九十八巻第一号(一九九九年一月)よりー

菊地知子

前号に引き続き、一九九五年から二〇〇〇年にかけて断続的に連載された「震災後の子どもたち」の記事から見ていきたい。私は、自分の身近に、最愛の甥おねがいを含め幾人か、件の災害直後に生まれた子ども(今や若者)を知っている。生まれる直前に胎内で阪神淡路大震災を、そして十七歳になつて間もない多感な時期に東日本大震災を経験した彼らは、早ければ来春には大学生や社会人になる。今は幼い子どもたちも、あつという間に思春期になり大人になつていく。そういう目で見ると、二〇一二年のこの時を生きている幼子たちがますますいとおしく大切な存在に思えてくる。

以下に、六甲学童保育所どんぐりクラブ指導員の森末哲朗氏による記事を見ていただきたい。「震災後の子どもたち」と題する二十四回にわたる連載で、森末氏によるものが六回ある。どの回も捨て難いがここでは主に、森末氏五度目の登場となる「おとなと出会うということ」を見ていく(※で囲んだ部分は、菊地による要約)。

震災後の子どもたち(2)　おとなど出会う「こと」（一九九九（平成十一）年第十九十八卷第一号）

森末哲朗（六甲学童保育所どんぐりクラブ）

《障害者センターで働く古くからの友人が、曰ころ出会う若者の最近の傾向として、「一言で言つたら、あんまり、おとなど出会つていない」という指摘をする。それと重なる話として筆者は、自分が水をこぼしておきながら「おばさん、水がこぼれた」と言いに来た学生がいたという喫茶店のママさんから聞いた話を思い出す。また、どんぐりクラブの活動の中でも、それと重なる体験をしたことを思い出す。》

（前略）そんなわけで、ある意味では最もおとなど出会うことが必要なその時期に、少年はそのことを避けたいと思い、おとなは、かする程度の出会いしか持てないでいることがまるであるようなのだ。（中略）ところが、あの大地震の混乱の中で、おとなど少年たちとのこうした膠着状態が一举に突破されたという稀有な体験を、多くの神戸市民は持っている。（中略）

日常を細かく区分けしている垣根が取り払われて、人間と人間との裸の対峙が生まれる。

おとなど出会うとは、そういうことだろうと思う。地震に見舞われて良かつたことなど何一つないのだが、敢えて「良かつたこと」を挙げれば、普段は見向きもされないチャバツの少年たちが、テント村のおっちゃんやおばちゃん、仮設（住宅）のおじいちゃんやおばあちゃんたちから大いに見直されたことだろう。そのことは少年たちにとつても、自分の生き方を考え直す契機にさえなったわけで、もしあの大地震がなかつたらこういう出会いは生まれなかつたかもしれない。《大地震に期待をかけるのは意味がないので》もつと日常の中でのこれらの十年を考えていくべきだらう。ではどうすればよいのか？

仕事柄なのか、元々のクセなのか、高みに立つて「考察」するだけでは気が済まない。かといって、良い知恵も浮かばない。

ただ、もしかするとそのヒントにはなるかなと思えることが、意外にとても身近な自分の足元にあつたのだ。

この夏、（中略）キャンプに出かけた。今年で十一回目。（中略）子どもは大いに自己主張をし、いさかいを起こし、自分とは異った「他者」を発見して成長して欲しいことは変わりがない。そのためには、子どもたちが自分を磨くための「群れ」の存在がとても大きな意味をもつていて。どんぐりには、二十四人の群れがあるのだ。

《すでに十年ほどどんぐりクラブの取材を続いている撮影グループがキャンプに同行、編集の村木さんが子どもたちへのインタビュー後に森末氏にこう言つた。》

「森末さん、このキャンプの中で一番おもしろいことはなに？　という質問をしたら、まさひろ（六年生）はどう答えだと思います？」

さてさて、お釜を使って皆んなのために飯つきをすることだろうか？　キャンプファイア一だろうか？　魚のつかみどりだろうか？　それとも学校的なこと一切から解放されて仲間と過ごすことの總てだろうか？　よく分からない。

「なんやろ？」「それがね、いろんなおとなど会えること、と彼は言つたんです」
あつ、とぼくは絶句してしまつた。そして、なるほど、と首肯いた。

七泊八日のキャンプ全体が、一人一人の子どもを生活者として磨くための「教育装置」だということの理解は持つっていた。ところが、そのキャンプを支えるために参加するおとなの位置、おとな子どもの関係については、こういうことだと明言できる程の理解は持つてい

なかつた。子どもを中心にして、全日程を支えるためのサポーターという捉え方をぼくはしていたようだ。

まさひろの答えを聞いて、「そうだ、子どもたちにとつては、個性豊かなおとなたちとの出会いの場でもあるのだ」ということを、改めて肝に銘じた。

七泊八日の間に子どもたちが出会うおとなの数は、地元のスキー場の皆さんも含めると軽く五十人は超える。子どもに厳しい人もいれば、甘い人もいる。こわいけれど頼りになる人もいる。よく声をかけてくれる人もいれば、無口な人もいる。そうしたおとなたちの間をかいぐりながら、「あのおっちゃんはここまでなら許してくれる。あのおばちゃんは、そうはいかん」と、子どもたちは自分とおとの間にある距離を本能的な物指しで計測する。叱られたり誉められたりの経験を繰り返し繰り返し積み重ねることで、子どもたちの思考に「練り」が入る。「世間」に明るくなる。

おとなどいえば親と教師くらいしか知らない子どもが増えている時代の中で、厚みのある出会いを楽しみつつ育つ子どもがいるのだ。

そういう場として意識して創った覚えはなかつたのだが、一緒に働き、一緒に遊ぶ生活の中でのおとなどの出会いは、とても大切なことを学ぶことのできる場でもあつたのだ。
「おばさん水がこぼれたよ」と言つた二十歳は、まさひろとは決して重なりはしない。

「震災後の子どもたち」のシリーズの残り5タイトルの他、第一〇一巻第七号の「昼間のきょうだい 夜のきょうだい」も、どんぐりクラブで育ち合つた（育ち合つた）子どもたちや大人たちのことが書かれている。併せお読みいただきたい。

（お茶の水女子大学）

子ども学の

ひらば

お便り

POST

● 遺志を引き継ぎます。
追悼 石井アユ先生 ●

4月2日朝2時半ごろ、八分咲きの桜の下、佐賀の高木瀬幼稚園の石井アユ先生が亡くなられました。まだ70代でした。

石井アユ先生は、佐賀の遊びを大切にする保育を支えてきた方です。「幼稚園と小学校の集まりで私が発言すると『女はあと、幼稚園はある』って言われたのよ」とおっしゃっていました。そんな時代を闘ってきてくださったのですね。目に見えるできることはかりを大切にする幼稚園が繁栄する昨今を嘆いておられました。突然副園長になって佐賀に来た私をいつもにこにこ見守ってくださいました。

その明け方4時、私は肩をトントンとたかれ夢を見ました。石井先生が「佐賀の保育はあなたに頼んだわよ」とおっしゃったような気がしています。こうやって「保育の心」は引き継がれていくのですね。

(佐賀大学文化教育学部附属幼稚園副園長 庄籠道子)

お茶の水女子大学 ECCELL 社会人プログラム
「変革期の乳幼児教育・保育を考える」
平成24年度 後学期 (10月開講) 受講生募集

現職保育者をはじめ保育・幼児教育や子どもにかかるすべての方々を対象に、豊かな学びを実現するためのカリキュラムを夜間(18:20~19:50)に開講しています(科目等履修生登録)。

【開講科目】

「コミュニティ保育資源の活用 II」

(火・担当 多田千尋)

「乳幼児発達障害論 II」 (水・担当 柳原洋一)

「現代保育課題研究 IV」 (木・担当 浜口順子)

「子ども理解と保育の探求 II」 (金・担当 未定)

「乳幼児保育マネジメント II」

(春期集中講義・担当 未定)

「比較保育実践研究 II」

(1/12, 13, 26・担当 星三和子)

【出願期間】平成24年7月23日(月)~27日(金)

【URL】<http://www.cf.ocha.ac.jp/nuyoji>

【Eメール】nuyoji-info@cc.ocha.ac.jp

【TEL & FAX】03-5978-5949 (安治)

絵本の紹介 「クマのあたりまえ」
魚住直子 ポプラ社 2011年

「生きていること」「生きること」にそれぞれの仕方で向き合うことになる生き物たちを主人公にした7編。死ななくともすむものになろうとした表題のクマの話も少し切なくて温かいが、身を挺して少女を助けようとした殺し屋のへびの話、美を理解するのは生きているからと教えられた、身も心も飢えていたライオンの話など、どれもさりげなく胸に沁みる。(K)

絵本の紹介 「ねんどの神さま」
那須正幹 作/武田美穂 絵
ポプラ社 1993年

兵器会社の社長になった男のもとに怪物がやってくる。それはかつて小学生の男の子が戦争を憎んで作ったねんどの人形が巨大化した姿だった……。那須や武田の作品をこよなく愛したある小学生の少年は、二人の作品を片っ端から読んでいて、この絵本にも出会ってしまった。愉快で温かい那須や武田の作品のイメージはここにはまったくない。読み終えて少年は、怒ったような泣いたような顔で深く困っていた。(K)

エピローグ

青い空、白い雲、森や山の緑、咲き誇る花々。夏のシーンを彩る色はどれも鮮やかで、まぶしいほどのエネルギーに満ちあふれています。

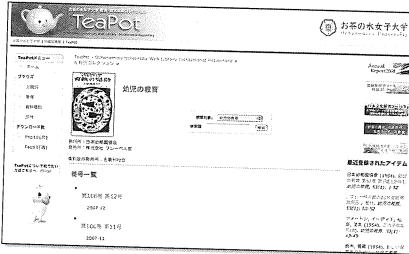
ステンドグラスを図案化した、現在の『幼児の教育』の表紙デザイン。毎号、その季節のイメージに合うよう、色を選んで作っています。編集部では「次号はこの色」と、およその色は決めてあるのですが、印刷所から送られてきた出来立ての冊子を目にした時には、ぱっと華やいだ気持ちになります。風や光の変化から季節の移ろいを感じ、次の季節の到来を予期しながら、心は、はや、新しい色を迎える準備をしているからでしょうか。

季刊誌になって6冊目となりました。季節とともにある雑誌になったことを表紙からも感じていただけたらと思います。(T)

幼児の教育 バックナンバーを
WEBページで公開中

「幼児の教育」または「TeaPot」で

検索 



<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/3705/bulletin/>

明治34年発行の創刊号から、現在、平成20年発行の第107巻までご覧になれます。

なお、自由投稿、「ひろば」への情報などもお待ちしております。
nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp まで。

次号予告 幼児の教育 秋号 2012年9月刊行予定

新企画も好評！ 充実した内容でお届けします。

特 集 問い直そう、保育の中のあたりまえのこと7 -「共感」って何だろう - 佐伯聰先生インタビューほか

シ リ ー ズ 子どもが育つ場所を訪ねて - バオバブ保育園(東京都多摩市) -

報 告 子ども学シンポジウムから - 福島発。子どもたちの現在 -

※タイトル・内容が変更になる場合もあります。

幼児の教育 夏号

第111巻 第3号

平成24年7月1日発行

編集発行人／浜口順子

編集担当／田中恭子

発行所／日本幼稚園協会

〒112-8610

東京都文京区大塚2-1-1

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発 売 所／株式会社フレーベル館

電話：03-5395-6657(編集)

振 替／00190-2-19640

印 刷 所／図書印刷株式会社

定 価／750円(本体715円)

©日本幼稚園協会 2012 Printed in Japan

編集協力／フレーベル館

編集スタッフ／伊集院理子

菊地知子

佐治由美子

宮里暁美

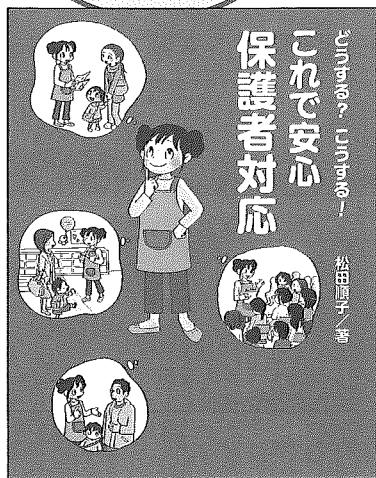
吉岡晶子

●ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613(営業)●

好評発売中

保護者との
やりとりが
楽しくなる！

イラストでわかりやすい 対応事例集



どうする？ こうする！ これで安心 保護者対応

松田順子／著
(東九州短期大学 特任教授)
定価1,785円（税込）

23×18cm 128ページ 10929

Point ①
Q&A形式

明日から役立つ
対応がわかる！

Point ②
イラスト

具体的な事例を
楽しく紹介！

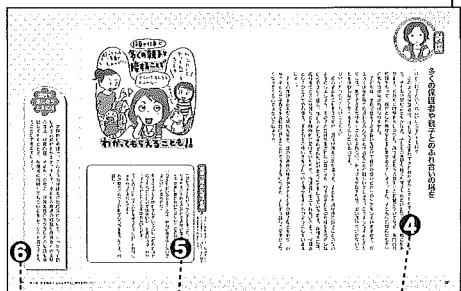
Point ③
ポイント解説

園での注意点が
わかる！

【内容】

- 第1章 いるいる！こんな保護者～保護者のタイプ別対応法
- 第2章 あるある！こんな子どもに関するやりとり
- 第3章 保護者自身の問題に向き合う
- 第4章 園の方針や体制への要望に対応する

あなたの悩みを解決する6つの構成



② 人物データ
相談内容の保護者のデータ

③ マンガ
相談内容のマンガ

① 相談
具体的な保護者対応の相談内容

④ 園内で話し合うときには
園で対処する際のポイントを紹介

⑤ どうする？ こんな例
現場から届いたその他の事例

⑥ 対応
注意すべき点や対処法を解説

好評発売中

子ども・保護者
との関係づくりの
特効薬！

保育がもっと好きになる 22の素敵なお話



子どもの見方が変わる みんなの育ちの物語

井桁容子／著
(東京家政大学ナースリールーム主任)
定価1,575円(税込)
19×15cm 112ページ 10930

講演会受講者の声

今すぐ子どもたちに
会いたくなりました
(30代・保育者)

私も言葉で
伝えられない乳児の
気持ちを汲み取りたい
(20代・保育者)

ほんわかと
肩の力が抜けて、
心が豊かになりました
(40代・母親)

保護者の成長を
認めてくれる
保育に感動！！
(30代・父親)

効能① 発達理解

子どもの見方が
変わり、保育が
もっと充実する！

効能② 信頼関係

保護者に信頼
される保育者になれる！

効能③ 自己成長

受け入れることで
自分にも人にも
優しくなれる！

【目次】

- はじめに
- ナースリールームへようこそ
- 子どもってすごい！
- 困ったトラブル？？？
- 親も子も育つ時

- 子どもがうれしいこと
- いたずらの意味
- 子どもと一緒に成長
- おわりに

エピソードの一例です。続編は本誌にて！

episode 1

子どもってすごい！

風邪で口内炎になった智香ちゃん。痛くて口に入れた食事を吐き出し、しばらくすると「鼻で食べた！」と鼻の下にニンジンをベタッ。続いてニヤリとして「おめめから食べる！」と切干大根を臉に。3歳児のユーモアに脱帽です！

episode 2

かみつきをトラブルにしない
友達の腕をかんでしまった浩介くん。お迎えに来たお母さんは顔面蒼白。容子先生が止められなかったことを誂び、「浩介くんはやさしい子に育つと保証します」と伝えると、お母さんは心が緩んで涙ぐみ、浩介くんを抱きしめました。

episode 3

ゆっくり育ちに付き合う

バジジャマで登園したい太くん。絶対阻止したいお母さん。朝の“ケンカ”が絶えない親子が、容子先生の助言で変化！ 育ちを面白がることを学んだお母さんに見守られ、太くんはいろいろな体験ができるってとっても幸せです！

episode 4

そのままで二重丸！

もうすぐ妹が生まれ、お兄ちゃんになる滉太くん。お兄ちゃんに対する周囲の期待が大きく、少し不安そうです。容子先生が「そのままでおいしいよ」と魔法をかけると、のびのびと自分を表現するようになった滉太くんでした。